昭和三十九年三月

妙蓮寺山古墳調査報告

島根県教育委員会

昭和三十九年三月

妙蓮寺山古墳調査報告

島根県教育委員会

凡　例

一、この報告は、島根県教育委員会が出雲市教育委員会との共催で、昭和三十八年八月に行なった出雲市下古志町妙蓮寺山古墳の発掘調査に関するものである。

二、発掘調査は、山本清・美多実・島重海・岩佐文子・池田満雄・近藤正・門脇俊彦・蓮岡法暲・角　清・糸賀達典・東森市良が調査員としてその任にあたり、島根大学・松江北高校・出雲高校・出雲工業高校・出雲二中の学生生徒有志、その他諸方面の参加協力により実施した。

三、この報告書の執筆は山本が担当した。

四、遺物の整理実測は近藤が中心となってまとめた。

五、実測図の浄写は、墳丘と内部構造に関するものは池田が担当し、遺物に関するものは近藤が担当した。

六、写真撮影は、発掘関係は主として山本が行ない、遺物は近藤と山本とで行なった。

目　次

一　調査にいたるまでのいきさつ……一
二　発掘調査の経過……二
三　位置と環境……七
四　墳　丘……一一
五　内部構造……一四
六　遺　物……一七
七　結　語……二七

図版目次

第一　妙蓮寺山古墳全景
第二　墳丘実測図
第三　墳　丘
第四　前方部の状態
第五　墳丘盛り土の状態
第六　石室前面
第七　石室実測図
第八　石　室
第九　石　棺
第一〇　石棺実測図および埴輪
第一一　ガラス玉、鈴釧、柄頭、鉄斧
第一二　鉄　鏃
第一三　馬具　轡および鞍磯金具
第一四　〃　壺鐙および鎖、鉸具
第一五　〃　雲珠および辻金具
第一六　〃　杏葉および須恵器

挿図目次

第一図　墳丘調査区分図……五
第二図　妙蓮寺山古墳附近の地形と主要古墳の位置……九
第三図　トレンチ土層図……一三
第四図　墳丘出土遺物実測図……一九
第五図　玉及び鈴釧実測図……二〇
第六図　柄頭及び鉄斧実測図……二一
第七図　鉄鏃実測図……二二
第八図　轡・鉸具実測図……二三
第九図　鞍磯金具実測図……二三
第一〇図　鐙実測図……二四
第一一図　雲珠・辻金具及び杏葉実測図……二五
第一二図　石室出土須恵器実測図……二六

一　調査にいたるまでのいきさつ

妙蓮寺山古墳は、低い丘陵の中腹に築いた長さ四九メートルばかりの前方後円墳であって、一種の横口式家形石棺を内蔵する特色ある横穴式石室を主体とするものであり、早くから石室が開口していたけれども、古墳全体に関する総合的な実態は、今回の発掘調査にいたるまでは明確でなかった。

この古墳に関し、すでに大正四年四月刊行の島根県史第四巻には

布智村大字下古志妙蓮寺山　発掘　前方後円式長径約十尺短径五尺の石室アリ

と記され、墳形を前方後円としていることが注意されるが、内部の具体的な形状等は記されていない。

昭和二一年の春、山本ははじめてこの古墳に案内を受け、羨道の蓋石の下に僅か四～五〇センチの隙間から玄室内に入れるようになっていたので、室内にもぐりこんで見ると、中に閉塞構造を具えた立派な横口式石棺が置かれており、また玄室の戸口は、立派な切石二枚を観音開き状に置いて閉鎖してあり、盗掘者はその上部を打ち壊して室内に侵入する口を作ったものであることを知り、その構造において極めて注目すべきであることを知った。同年一一月梅原末治博士を、附近の放れ山古墳・宝塚古墳とともにこの古墳に案内したところ、博士は件の僅かな隙きまから中に入って室内を実測せられ、その注意すべき構造であることを指摘せられたのであった。なお当時は、この墳丘は上手の方の地山を十分に切り下げないで作った円墳と認められ、「前方後円」と称するのは、墳丘の西北の裾にある平面が、高い崖によって水田に臨んでいる状態を見誤ったものと思われたのであった。したがって、真実の前方部は、相並ぶ別の墳丘と考えられたのであった。

近年に至り出雲高等学校の美多実教諭が、生徒とともに、羨道および玄室内に陥入の土砂を排除して清掃し、玄室戸口は扉状の切石の一枚に前方から円柱状の石材を立て掛けて閉塞した特殊の構造のものであることを明かにされ、また玄室底面から馬具類の残片等若干の遺物の残存するものを検出された、その後昭和三五年に出雲市は文化財としてこれを指定し、入口附近に屋根を設け、周囲に有刺鉄線をめぐらしてその保護の道を構じた。

昭和三八年度において、島根県教育委員会は出雲市教育委員会と共催でその南接の墳丘上の部分とともにこれを発掘精査して、保存と活用に資することとなり、同年八月一日より一四日までの期間の予定でこれを実施した。

二　発掘調査の経過

発掘調査を行なうために左記のように調査団を編成した。

調査団

団長	島根大学助教授	山本　清	
団員	出雲高等学校教諭	美多　実	
	松江北高等学校教諭	島　重海	
	仝	岩佐文子	
	松江南高等学校教諭	池田満雄	
	島根県立博物館学芸員	近藤　正	
	邑智郡邑智町君谷中学校教諭	門脇俊彦	
	大原郡大東町久野中学校教諭	蓮岡法暲	
	出雲工業高等学校教諭	角　清	
	松江市立女子高等学校教諭	東森市良	
	出雲第二中学校教諭	糸賀達典	

事務局

島根県教育委員会	文化財係長	井上猟介
仝	文化財保護主事	石塚尊俊
仝	嘱託	伊藤菊之輔
出雲市教育委員会社会教育係長		錦織邦明
仝	主事補	藤原芳雄

参加

島根大学学生	
出雲高校生徒	
松江北高校生徒	
出雲工業高校生徒	
出雲二中生徒	
地元有志	

地元以外の調査団員及び参加者は調査期間中出雲市下古志会館に合宿した。

日をおうての調査の進行状況は次のようである。

八月一日（快晴）　山本・美多・門脇・蓮岡・糸賀・井上・石塚・錦織・藤原・島大三・松江北高四・出雲高一五・出雲工二・出雲二中三

午前一一時より、妙蓮寺にて供養、終って現場にて鍬入式を行なう。県教育委員会社会教育課宍道課長補佐・井上文化財係長・石塚主事・出雲市教育委員会長岡教育長・馬庭社会教育課長・錦織文化財係長・神門公民館長奥井昌一郎・妙蓮寺檀家総代神田良二郎氏・調査団員其他参列

作業は午前十時から開始し、墳丘の伐採と墳丘測量を行なう。伐採により前方後円墳らしい形が次第に明かになる。測量は、まず最も高い前

方部頂上に基点を定め、中軸線に四メートル毎に杭を打つ。

八月二日（金）（快晴）　山本・池田・門脇・蓮岡・糸賀・井上・錦織・藤原・島大四・松江北高校五・出雲高校五・出雲工二・出雲二中

一

前方部上面の調査――昨日四メートル間隔に杭を打った中軸線の東に幅二メートル、西に二・五メートルの平行線を引き、中軸線とこれら東側の線及び西側の線との間を、前方部で最も高い基点の所から、くびれ部に至る間、四メートル毎に、東側をA_1・B_1・C_1・D_1・E_1・とし、西側はA_2・B_2・C_2・D_2・E_2の区域に分け、まず頂上部のA_1・A_2から始めて、地表面の有機物等を取り除いて検討した。A_1・B_1・B_2・C_1には埴輪円筒の小片が点々と認められるが、その底部の原位置に留まるものは一つも見当らない。またA_1区西北部では五輪塔の上部の残片が認められた。

測量――前方部の大部分と後円部の一部を描く。$\frac{1}{100}$の縮尺で五〇センチごとに等高線を描く。

なお後円部周囲の伐採を行なう。

八月三日（土）（快晴）　山本・美多・池田・門脇・蓮岡・糸賀・井上・藤原・島大三・松江北校五・出雲高一二・出雲工二・出雲二中一

前方部上面――昨日に引き続き表土の調査を行なう。C_2区・D_1区にも埴輪片を認める。なおA_2区では五輪塔の残片（火輪二個その他）を認める。よってこの部分を少しく掘りこんで調査を進める。

前方部斜面の調査――墳丘の構築状態を調べるため次のようにトレンチを定めた。

F――A_1の東A中点とB_1の東側中点との間の範囲を東方へ四・五メートルの長さの区域とする。この区域は東側の斜面とその麓の平坦地にまたがるものである。

G――A_2の西南隅から南方へ向け、幅一メートル、長さ七メートルの区域とする。ほぼ前方部の前側の斜面と、それに続く平坦地とにまたがるものである。

H――B_2の西北隅から西方へ向け、幅一メートル、長さ一〇メートルの区域とする。これは西側斜面とそれに続く平坦地にまたがるものである。

右のようにトレンチを定め、まずその表面の有機物を除いたところ、A_1とB_1に隣る斜面の部分には多数の埴輪小片が散乱しており、沈線と羽状文をもつ土師器の小片も認められた。

測量――後円部を描く。全体の九分通り成る。

なお後円部周辺の伐採を続行。

八月四日（日）（快晴）　山本・島・岩佐・池田・門脇・蓮岡・糸賀・井上・島大四・松江北高五・出雲高一八・出雲工一

A区域発掘――五輪塔関係のことも考慮し慎重に発掘したが、そうした堀り形等は認められず、塔の石材は地表に置かれたものと考えられた。地表下三〇～五〇センチまで掘り下げる。

Fトレンチ――表土層発掘

Hトレンチ――約七〇センチの深さまで発掘。埴輪片・須恵器片少量検出。

Gトレンチ――表土発掘。埴輪片。弥生式土器片（底部）検出。

測量――西側の裾、石室実測基線等を記入。ほぼ墳丘測量を完了。

なおA_1～E_2の区域から北方へ後円部頂上を通り北の裾に至る区域を定め、E_2の隣接区をM、その北から頂上部にかけてをN、その北墳裾まで含めてO区と定める。後円部頂上、すなわちN区の北部とO区の南部には埴輪円筒の破片が地表面に散在している。

八月五日（月）（晴）　山本・美多・島・岩佐・池田・門脇・蓮岡・東森・糸賀・石塚・錦織・藤原・島大三・松江北高二・出雲高二四・出雲工一・出雲二中一

A_2区――墳丘の構築状況をたしかめ、前方部に埋葬構造の有無を調べるため深く掘り下げる。本日地表下約一・一メートルまで。地表下九〇センチより弥生式土器底部を、また一一〇センチより同式土器片検出。

B_1区――A_2との間に畦を残して発掘。

F区――全面堀り下げ、墳丘斜面の基底部をたしかめ、壁面土層を実測。

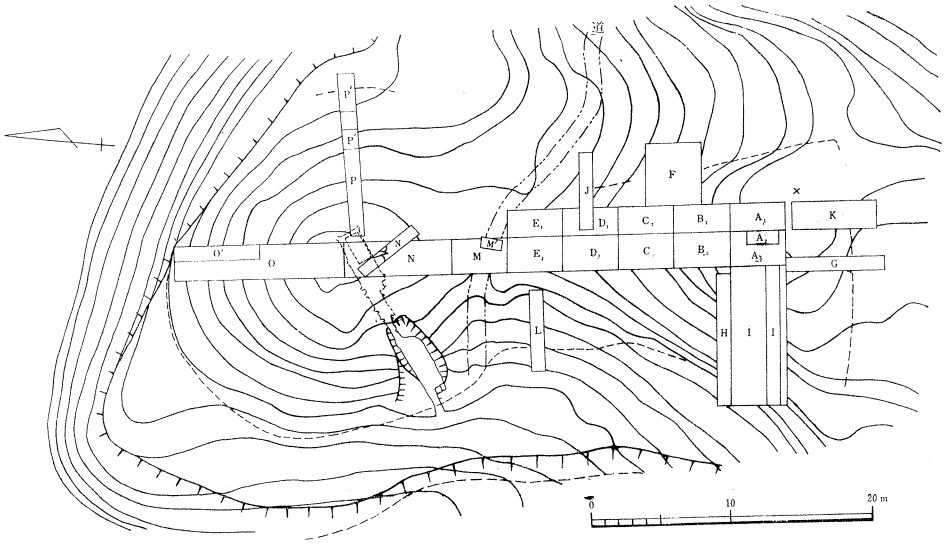
G区――掘り下げて土層実測。

H区――発掘。土層実測。

I区――H区の南にA_2に接し西方へIに平行のトレンチを設けそのうち南部を幅一メートルだけ深く掘りI′として発掘。土層実測。埴輪片、土師器を検出。

P区――後円部頂上より主軸と直角に東方に向け墳丘裾までのトレンチを定めて発掘。本日は表土を検討。

なお本日より後円部に開口している石室の実測を開始。



第一図　墳丘調査区分図

八月六日（火）（晴）　山本・美多・岩佐・門脇・蓮岡・東森・糸賀・藤原・島大二・松江北高五・出雲高一九・出雲工一・出雲二中一

A1区――一・九五メートルまで掘り下げ。盛土層には異状なく、地山表土に達する。

A2区――約二メートルまで掘り下げ。右同様。

B2区――約二・一メートルまで掘り下げ。右同様。

H区――地山面まで掘り下げ。右同様。

I′区――地山面まで掘り下げ。右同様。底部を含む弥生式土器片を検出。地山表面に散布していたものと考えられた。

以上により前方部の高所の土層の状態は概ね判明したのであるが、この部分に、主体構造の存しないことはほぼ明らかとなった。

八月七日（水）（晴）　山本・美多・島・岩佐・門脇・蓮岡・東森・井上・藤原・島大三・松江北高五・出雲高一九・出雲工一

A1区――地山を確認するため補足発掘。実測。

B1区――深く掘り下げる。盛り土に交り土師器片あり。盛土層異状なし。

B2区――昨日の発掘を補足。盛土層異状なし。土層実測。

D1区――地山面まで発掘実測。

I′区――地山面まで発掘完了。実測。

J区——D_1の中央東側に接し、墳丘東斜面とその裾の平地にかけて幅一メートル、長さ四メートルのトレンチを定め、地山まで掘る。盛土の中から羽状文ある土師器片を検出。土層実測。

K区——A_1の南に接し、前方部南斜面からその裾の平地にかけてのトレンチを定め、深く発掘。弥生式土器小片検出。

L区——E_2区の東に離れて、墳丘斜面の裾と思われるあたりを中心とし、幅一メートル、長さ三・五メートルの東西方向のトレンチを定め、地山の面まで掘り下げて、墳丘の築成方法とその原形について検討。表土中から埴輪破片を検出。

M′トレンチ——M区の中央、後円部と前方部の接合部で最も低くなっていて、今小路が横切っている地点をえらび、地山まで掘り下げて盛土を検討、実測。

石室実測——昨日の作業を続行。

本日、出雲高校所蔵の当古墳遺物を宿舎に運び、調査に取りかかる。

八月八日（木）（晴・夕方曇）　山本・美多・島・岩佐・近藤・門脇・蓮岡・東森・島大四・松江北高五・出雲高一八・出雲工一

J区——東へ一・五メートル延長して発掘、実測。トレンチの西部には地山の原地表面が残存し、それから東部には、その地山を削って作った斜面があり、前方部の東側はもとの山を削り取って、まず一応墳丘の形を作り、その上を盛り上げて前方部を築成した工程が明かとなった。

O区——地山と思われるところまで掘り下げる。

K区——地山まで掘り下げ、土層実測。これも、地山を削って前方部先端の形を形成している。

L区——地山を削って墳丘の西側斜面を形成したことが明瞭となる。地山を削った斜面の上には盛り土でなく、崩れ落ちた黒色の表土が直接かぶさっている。表土から埴輪片検出。

N′トレンチ——深く掘り下げて、後円部の築成状態を検討する。

O区——深く掘り下げる。表土中から埴輪片、須恵器小片を検出。

八月九日（金）（曇、台風）　山本・美多・島・岩佐・近藤・門脇

L区——補足発掘。実測。

N′トレンチ——発掘続行。地表面下約二メートル、玄室蓋石の下面から約一・一メートルまで掘り下げる。ここの盛り土は、前方部の盛り方とやや異り、多くの薄い土層が数多く重なっておりまた甚だ堅く、少しずつ土を盛って、その都度打ちかためて盛り上げたことが知られる。ま

た各土層は石室側壁の石まで確実に密着しているので、石室の石を積み上げながら逐次盛り土を加えて行ったことが知られる。

O区――発掘実測。

八月一〇日（土）（曇、午後雨）　山本・島・岩佐・東森・糸賀・井上・島大四・松江北高三

昨日の作業に引続き各部の補足調査並びに実測を行なう。午後は雨となり、各員も連続十日間の作業に疲労の色が見えるので休業。

八月一一日（日）雨　島・岩佐・池田・近藤・蓮岡・東森・糸賀・井上・島大四・松江高三

雨天の間隙をとらえて、N′トレンチの実測と撮影を行ない、また各部調査の補足をなす。一方玄室床面、とくに石棺と室壁の間の床面を調査し、石棺と奥壁との間からは完形の鉄製の柄頭（円頭）、その他鉄鏃残欠を多数検出した。なお宿舎に於て出雲高校所蔵の遺物の調査を行なう。

八月一二日（月）（晴）　山本・島・岩佐・池田・近藤・蓮岡・東森・糸賀・島大五・松江北高四

P′トレンチ――P区の墳丘斜面の裾の附近をとくに深く掘って地山と盛土の関係を検討。土層の実測をなす。玄室内床面をさらによく調査、残存遺物を採取した。

以上でほぼ予定の調査を終えたので、一部の埋戻し作業をなし、調査団員は午後三時作業を打ち切り、宿舎の整理、借用遺物の返還などをなし、一同五時過ぎ現地を出発帰途につく。埋戻し作業は、池田・蓮岡両団員が残留して人夫を指揮した。

なお右の調査期間中、出雲市の新宮一世起氏は前後一〇日間、竹崎三子雄氏は三日間、調査に参加して助力された。

三　位置と環境

妙蓮寺山古墳の地籍上の所在は島根県出雲市下古志町一六六〇番地である。それは簸川平野の西部、神戸川左岸の平野の南に連なる低い丘陵の中腹北斜面に築いた前方後円墳で、前方部を丘陵の高い方に向け、平野の方に後円部を置くものである（図版第一）。

峡谷を北に向かって流れ出た神戸川が出雲市馬木町のあたりで屈曲し平野に出でて西北方に進み、古志橋のあたりから西へと進むのであるが、妙蓮寺山古墳は、古志橋の西に接する古志町の南方にあたり、神戸川からいうと、川の南方一キロ余りの所で、南方から延びて来た丘陵の尖端にあたっており、比高三〇メートルばかりの丘陵の中腹に加工して営んだものである。

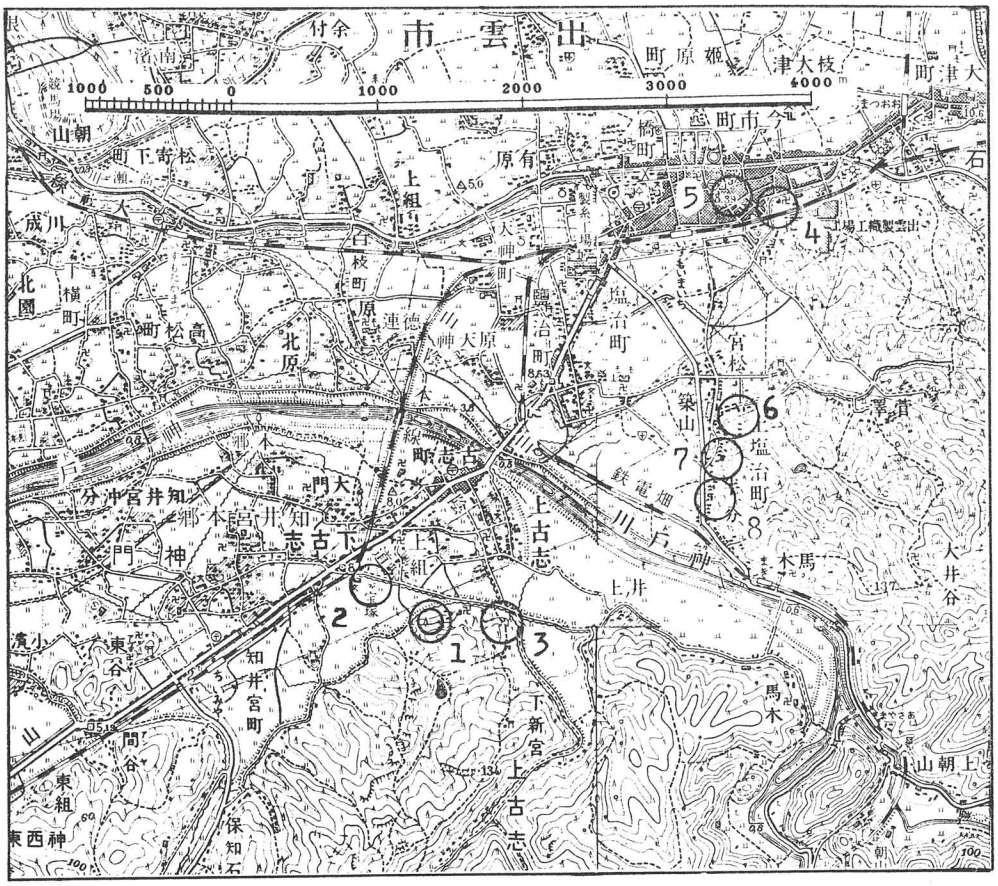
このあたりの先史遺跡を略見すると、縄文式遺跡は、簸川平野の方面には余り知られておらず、平野の西北の隅に大社町菱根（早期末か）、

原山（後期）が土器出土地として知られている程度である。しかし弥生式遺跡は、主なものに大社町原山（前期以降）、出雲市矢野町矢野貝塚（前期以降）、同市知井宮貝塚（中期以降）などがあり、知井宮貝塚は妙蓮寺山古墳から西方一・五キロの近い所である、中期以降の土器を小量出したところや、弥生式石器の採集されたところはかなり多く、土師器になると一層多いのは当然である。

次に古墳の方は、神戸川左岸地域では妙蓮寺山古墳の西北方約五〇〇メートルにある宝塚古墳、東方約五〇〇メートルにある放れ山古墳は著しいものである。東北方約五〇〇メートルにある大梶古墳も注意すべきものである。その他横穴等は頗る多い。少し離れるが、神戸川の右岸地帯を見ると、今市町大念寺古墳、上塩治町築山古墳、同地蔵山古墳はいずれも史跡に指定された、もっとも顕著なものであり、その他今市町塚山古墳、上塩治半分古墳なども注意すべきものである。いまこのような出雲市内の神戸川両岸附近の古墳をあげると次のようである。

（神戸川左岸）

1	妙蓮寺山古墳	前方後円	下古志町
2	宝塚古墳		同
3	刈山古墳群	円墳	馬木町
4	小坂古墳	円墳	同
5	放れ山古墳	円墳	古志町新宮
6	大梶古墳		同
7	井上横穴群		同　井上
8	地蔵堂横穴群		下古志町
9	深田谷横穴群		芦渡町深田谷
10	芦渡壊滅古墳		同
11	福知寺横穴群		知井宮町山崎
12	間谷（かんや）古墳		同　間谷
13	浅柄（がら）古墳		同　浅柄
14	北光寺古墳		東神西町北光寺



第二図　妙蓮寺山古墳附近の地形と主要古墳の位置

（1　妙蓮寺山　2　宝塚　3　放れ山　4　大念寺
5　塚山　6　塩治築山　7　地蔵山　8　半分）

15　岩窟横穴　東神西町神条
16　神待山横穴群　同
17　田中谷古墳　西神西町田中
18　小浜山古墳　神西沖町小浜
19　小浜山横穴　同　同
20　小浜岩山横穴　同　同
21　小浜寺山横穴　同　同
22　湖東屋山横穴群　同　山地
（神戸川右岸）
23　大念寺古墳　前方後円墳　今市町鷹ノ沢
24　塚山古墳　同　塚根
25　光明寺古墳　円墳　同
26　築山古墳　円墳　上塩治町築山
27　地蔵山古墳　円墳　同　池田
28　半分古墳　方墳？同　半分
29　半分横穴群　同　同
30　工業高校横穴群　同　同
31　三反谷横穴群　同　同
32　大井谷横穴群　同　大井谷

右のうち主なものについて概要を述べれば次のようである。

②宝塚古墳(註1)は水田の中に孤立している古墳で、墳形は明かではないが、内部構造は切石造りの横穴式であって、玄室は奥行三・六メートル、幅二・一メートルの比較的小形ながら、中に横口をもつ家形石棺をもつ特色のあるもので、史跡に指定されている。

④小坂古墳(註2)は小形の円墳であるが、小形ながらこれも切石造りの横穴式石室であって、中に長方形の石に円形の彫り込みをした骨蔵器と思われるものがあり、蕨手刀が検出されて注目されるものである。

⑤の放れ山古墳(註3)は低い丘陵上の小形の円墳であるが、やはり切石造りの横穴式石室を主体とするもので、玄室は奥行三・五メートル、幅一・七メートルで、室の両側に低い縁をそなえた石床が三人分設けられた特色のあるもので、金銅装の大刀・鉄地金銅張の雲珠・辻金具・杏葉・鏡板・須恵器等を出した古墳で、県の史跡に指定されている。

⑥の大梶古墳(註4)は封土を失い石室の蓋石もなくなっているが、玄室の三壁を各一枚ずつの切石で構成するもので、後記の地蔵山古墳や、その他出雲の国の東部に多い石棺式石室に類するものである。

⑦井上横穴群(註5)⑪福知寺横穴群(註6)⑲小浜横穴㉚工業高校横穴群等には石棺や特別の石床のある入念のものが含まれている。また⑨深田谷横穴群には人物を壁面に線刻したものがあって世に知られている。

㉓大念寺古墳(註7)は、長さ八四メートルある大形の前方後円墳で複室構造の横穴式石室を主体とするものである。石室の全長一二・八メートル奥室は幅約三・一メートル、長さ約六メートル・高さ約三・五メートルあり、中に幅一・七メートル、長さ三・三四メートル、高さ一・九メートルの巨大な横口つきの家形石棺がある。もとは前室にも一つの石棺があった。石室、石棺の壮大な点では山陰の代表であって、史跡に指定されている。文政九年の発掘であるが、出土品中に金銅製履(くつ)のあったことが伝えられている。

㉖の築山古墳(註8)は直径四〇メートルばかりの円墳であって、切石構成の大形の横穴式石室を主体とし、中に横口式石棺二基を安置するものであり、優秀な副葬品とともに、前記大念寺古墳と相まって、出雲の後期古墳の代表的なものである。指定史跡である。石室は総長一四・六メートル、玄室は幅二・八メートル、奥行六・七メートル、高さ三メートルあり、石棺とともにすこぶる整美なものである。副葬品としては銀装円頭大刀、同方頭大刀、金銅飾、銀飾等の馬具類などがあり、金銅冠を出していることが注意される。

㉗地蔵山古墳(註9)は直径一五メートルばかりの比較的小形の円墳であるが、主体は切石造りの立派な複室構造の横穴式石室であって総長約九メートルあり、奥室に横口式石棺一基と障屏をめぐらした石床をそなえたものである。奥室は四壁を一板石で構成する特色のあるもので、出雲東部に多い石棺式石室に通じる特色を示している。内部構造が整美な特色あるものであるので、指定史跡となっている。

㉔の塚山古墳はやや小形ながら、やはり切石構成の横穴式石室で、中に一種の家形棺を置くものであるが、その棺は一種の刳り抜きの石棺の身を中央から切断し、これを両端に立てて家形の組合わせ石棺を構成する変ったもので、一種の横口式石棺の形をとり、床は一種の有縁石床である。

㉘の半分古墳は横穴式石室に石棺二基を置くものと伝えられている。

以上神戸川下流域の古墳をみると、その顕著なものはすべて後期のものであり、それは出雲の国の後期古墳の中で顕著なものは、多くこのあたりに集中しているといってもよいのである。掲げた三二個所の古墳のうち、明らかに後期ではないと思われるものは、⑬の浅柄古墳であるが、これはほとんど墳丘をもたない山上の箱式棺で、副葬品の認められなかったもので、このようなものはなおほかに数多く隠れているかもしれないが、目ぼしいものは後期の古墳のみであり、しかも後期の古墳としては、出雲の主要なものがこのあたりに集中していることが注目される。妙蓮寺山古墳の所在地域は、このような環境であることを注意したいのである。

四　墳　丘

妙蓮寺山古墳の墳丘は、長さ約四九メートル、後円部直径約二五メートル、前方部先端の幅二二メートルばかりの南向きの前方後円墳で、後円部及び前方部ともに埴輪円筒を用いたものである。葺石や周湟の施設は存しない。墳丘の高さは、最も低い後円部西側の裾を基準にとった場合、後円部の高さ約四・五メートル、前方部の高さ七・五メートル、くびれ部の高さ三メートル余りであって、後円部に比し前方部は約三メートル強だけ高いものである。

墳形は、全体の原形はかなり保たれているけれども、もちろん細部においては幾分の変形したところもある。前方部東側のくびれの近くのあたりの裾（すそ）の線が明瞭でないことや、前方部西南端の隅角部の裾の線等もややあいまいなのは、封土が流れて裾に堆積したためかと考えられ、前方部上面の先端部（最高所）は、後に記すように、五輪塔を据えなどしたために削って平されたことも考えられる。また後円部の東北側の裾は、崖崩れ乃至採土のため幾分削り取られた形になっていることは、実測図からも十分察せられるであろう。（図版第二）

さてこれら裾の線のあいまいになっている部分のうち、後円部東裾に関してはPトレンチの土層図にあらわれているように、地山を削って造った墳丘斜面の裾が地下に埋もれていて、本来はきちんと区別のつくように造られたことがわかり、前方部のくびれ部寄りの東裾もJトレンチ

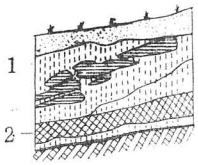
の土層図により同様のことが判明する。またその反対側の西斜面においてもほぼ同様の地山切削の状態を見ることが出来る。このようにして、墳丘全体の形を見ると、前方部は、くびれ部の幅は約一三メートルあり、くびれ部から、前方部先端に向かって、約二分の一のところまでは両側の裾の線がほとんど平行しており、そこから西側だけが、先端に向かって急に幅を増しているので、古墳全体の形が、中軸線に対し、やや不対称になっているのである。これは、墳丘に対し本来の丘陵は東と南が高く西側が谷になっていたのであるが、それに対し徹底した加工を施さなかったためであろう（図版第三）。

墳丘の構築の状況を見るに、K・G・H・L・O・P・J等のトレンチ土層図にうかがわれるように、まず自然丘を削って、墳丘の基底部を形成し、削った土をその上に盛り上げて墳形を完成させたものであって、その盛り土の深さは、前方部の最高所では深さ一・五～一・七メートルばかり、くびれ部附近では、一メートル余り、後円部では二・五メートルばかりである。（図版第四の(二)および図版第五）（第三図墳丘土層図参照）

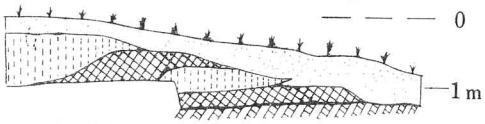
墳丘の周囲には堀はないが、墳丘の東側には自然丘との間に幅七～八メートルの平な地面（実は南が高く北が低いが、東西は平である）前方部の裾の線と南の自然丘との間にもやはり幅一〇メートルばかりの平な面があり、また後円部の西北側にも裾に続く平地がある。これらの平地は墳丘の築成にあたり加工されたものであることはいうまでもない。ところで、先にも触れたように、この墳丘東側と、前方部の南側（前面）とはこのように平地ではあるが、自然に対する掘削加工が僅かに形式的なものであるために、実測図に見るように、前方部では、等高線は前方部前端の最高所を中心としてこれを一周せず、東側では東西の平行線に近いものとなり、前方部前面では南北の平行線に近いものになってしまっているのである。

以上の通り、要するにこの墳丘は、丘陵の斜面に築くにあたり、高い方に前方部を造り、低い方に後方部を造り、前方部の輪郭を造るためには、その東側と南側のより高い斜面の側は、幾分地山を削り取ったけれども、その削り方は形式的であり、しかも、後円部の頂上よりも高い前方部の地山の上にさらに盛り土をなしたから、前方部の前端は後円部よりもはるかに高いものとなったのである。

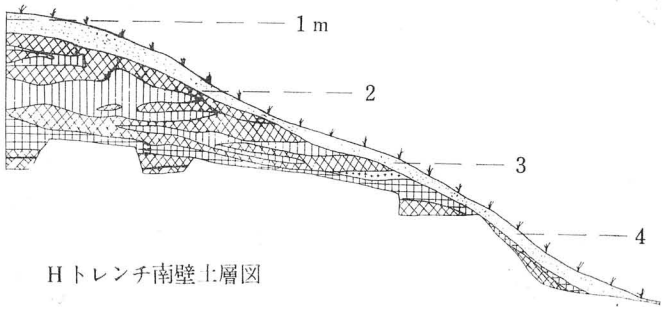
次に墳丘上面の形であるが、まず後円頂上部は、今はゆるやかな傾斜のまんじゅう形であるが、実は早く盗掘された時にここの土を掘ったものか、石室の天井石の上面が一部露出し、石の間隙から室内に明りがさしていたのであったが、近年土を加えて埋めたものであるから、正しい元の形は不明であるが、恐らく今と似たものであったであろう。前方部の頂上部は、調査区分図のA_1・A_2のあたりが一つの平面をなしているのは、今A_2区地表に散乱している五輪塔の置かれた時に若干加工されたためではないかと推測される。



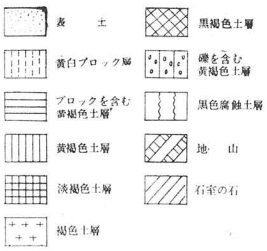
A′₂トレンチ東壁土層図

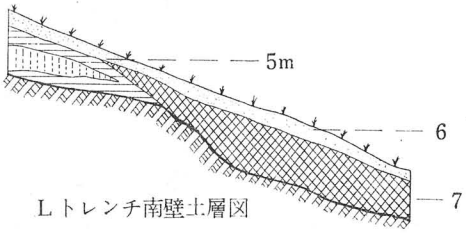


Kトレンチ東壁土層図

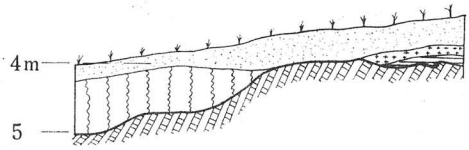


Hトレンチ南壁土層図

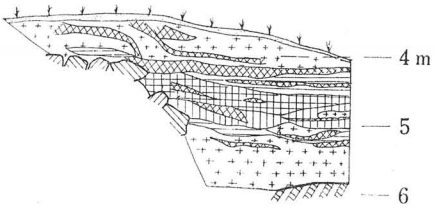




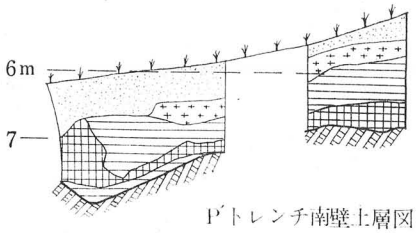
Lトレンチ南壁土層図



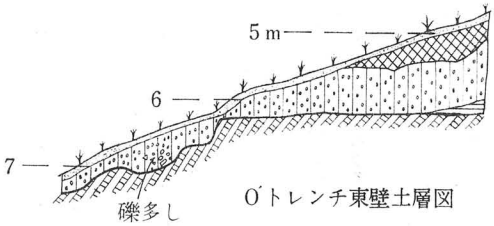
Jトレンチ南壁土層図



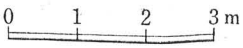
N′トレンチ東壁土層図



P′トレンチ南壁土層図



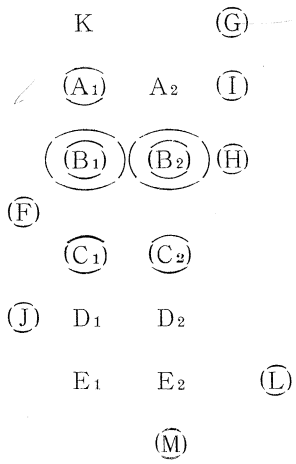
O′トレンチ東壁土層図



第三図　トレンチ土層図

次に埴輪円筒の配置については、かなり注意して調べたが、原位置にあるものは一つも判明しなかった。

まず前方部上面は主軸に沿うて四・五メートル幅で、全面を調べ、またこれと直交するトレンチを定めて調査したことを先に記したが（第一図参照）埴輪円筒の破片は次の○で囲んだ区域から発見された。（◎印はとくに多いところ。）



これによるとB_1・B_2のあたりがもっとも多いのであるが、それはことによるとA_1・A_2の方から封土が削り下ろされたためかもしれないのである。いずれにしろ、前方部上面に広く散布していた状態から推して、もとこの面に円筒を立てめぐらしていたものと考えて差支えない。（図版第四の㈠）

次に後円部もこれを中軸線に沿うN・Oの両トレンチともに円筒片が検出され、これも頂上部に近いところから出土しているので、墳頂附近に立てられていたものと考えられる。

五　内部構造

主体は後円部中央にあり、墳丘中軸と斜に西南方に開口する横穴式石室であって、その玄室には横口式の家形石棺一基を置くものである。

まず石室について見るに、割石を以て構築した、いわゆる両袖式の石室であるが、玄室の戸口を板状に加工した二枚の切石で閉塞するところに特色がある。（図版第六の㈡～第八の㈠）

玄室は奥行き約四・四メートル、幅約一・九メートル、高さ約二・二メートルあり、両側壁は下部は大石を用い（南壁は二個、北壁は三個）その上は厚さ三〇センチ内外、長さ一メートル内外の割石を横積みとし、間隙に適宜小石を充顕する手法を用い、奥壁は一枚の大形の割石を用い、その上部等若干の不足部分を適宜の石で補ったものである。壁はほとんど垂直である。このような玄室と羨道との間には、厚さ六〜七〇センチ、高さ一・五メートルばかりの柱状の割石を、玄室西側石よりも四〇センチばかり持ち出した位置におき、いわゆる両袖形となし、その上に幅約一メートル、厚さ八〇センチばかりの角柱状の石を横架して門のような形を作る。この横架した石の前側の下部は刳り込みを施して閉塞の切石を受ける構造としている。また両側の門柱状の石の間には幅約五〇センチの切石を床面に置く。閉塞石をのせるためのもので、これも羨道の方半分ばかりは約七センチ低くして閉塞石を固定するかかりとする。玄室の床面には河礫を敷く。天井は二枚の大石でおおう。羨道部は奥行二メートル余り、幅約一・五メートルあり、やはり下に大形の石を用いた積み方である。天井は一枚の大石を用いる。

さてこの石室で、もっとも注意されるのは玄室戸口閉塞であるが、右に記したような門形の石組みの構造の前側に、二枚の凝灰岩製の板状の切石をあてがい、それに太い柱状に加工した石を斜に立てかけて押える仕組みである。（図版第六の㈡および第八の㈠）閉塞用の切石は、二枚のうち南側のものは幅八四センチ、高さ一・五メートル、厚さ一七センチの矩形の切石であり、北側の分は、幅六六センチ、高さ一・五メートルあり、これら二枚の石を、あたかも観音開きの扉のように立て並べ、中央、両者の合せ目は小口を互に斜に削って南の石を開かないように北の石が押える仕組とし、その北の石に円柱状の石を斜めに前方から立てかけて押えるのである。この押え石は直径三〇センチ、長さ一・〇五メートルの円柱状（厳密にいえば多角柱状）で凝灰岩製である。元来羨道部には土が充満していたのであるが、美多実氏が土を排除して清掃された際には、それが本来の状態をよく保っていたとのことである。なお観音開き状の閉塞の石は、盗掘の際内部に侵入するために、その中央部を幅約九〇センチ、高さ四〇センチばかりのところ砕いて孔を造ったために、それだけ欠損している。

次に羨道の閉塞であるが、羨道戸口附近に経三〜四〇センチ程度の塊状の石や、小形の石が多数残存しているので、通常の横穴式石室のように、このような石を若干の傾斜をつけて積み上げ、羨道蓋石の端の附近に到達させて閉塞するという式のものであったと考えられる。

石棺は凝灰岩製の横口をもつ整正な家形石棺であって、玄室の南壁に接し、奥（東）壁寄りに置かれ、北側壁の方に向かって口を開いている。（四版第八の㈡）棺身は長さ、二・二二メートル、幅一・一七センチ、高さ七〇センチばかりあり、刳り抜きであって、内法は、長さ一・八メートル、幅七〇センチ、深さ四八センチである。身の西壁を長さ一・〇七メートルにわたり切り取って矩形の入り口とし、その口の左右両方外側から縁に沿うて幅四センチばかりのところを一〇センチばかり刳りこんで、閉塞の切石を受けるかかりにしている。（図版第九の㈠）棺

身の奥壁に面する側には直径約一八センチ、長さ一六センチの円形の突起が一つだけある。

蓋石は、長さ一・一六メートル、幅一・一メートル、高さ三八センチあり、上面は四注式屋根形で、棟の長さ一・四二メートル、棟の幅三九センチ、軒の厚さ約一四センチである。内面も深さ一八センチの屋根形に刳り込んでいる。蓋石の南側、すなわち横口のつく方と反対側の、屋根から軒にかけての位置に、直径一四センチばかりの短かい円形突起を三個配している。（図版第九の㈡）なお蓋石の横口の上にあたるところは幅六センチばかり刳りこんで閉塞の石を受けるようになっている。棺の身と蓋を加えた総高は約一・〇五メートル、棺内空間の高さは約六六センチである。

次に注目されるのは、棺の口の閉塞である。口は前述の通り幅一・〇七メートル、高さ四八センチの矩形であるが、その上下左右に閉塞石を受ける刳り込みがあり、この戸口の前に接して、方柱状の切石が置いてある。それは幅・厚さ各二〇センチで、長さは四四センチのものと八〇センチのものとの二石で、両者合せて一・二四メートル、それは丁度件の棺の横口の幅より少し大きく、閉塞の切石を口にはめこんで、それの下底を押え留める働きをするものである。閉塞の石は幅四〇センチのものと七〇センチのものとの二枚より成り、今そのうち右側の七〇センチの方が閉塞の原位置のまま遺存する。それは厚さ一四センチばかりのものであるが、それが左側の閉塞石と接する面を見るに、あたかも玄室閉塞と同様に斜めに削ってあって、左側の石を受け留めるように出来ていることが注意される。また石室内には直径二〇センチ、長さ五四センチの凝灰岩製の円柱状の物が遺存した。これによって見れば、石棺の口も、玄室戸口と同様に二枚の切石を観音開きのように置いて戸口を塞ぎ、その下底部は角柱状の石で根止めをし、向かって左側の石に伴の円柱状の石を立てかけて上部の押えとしたことは明瞭である。而して両石の合わせ目は互に斜に組みあっているので、向かって右側の石も左の石で固定される仕組みである。出雲市今市町の大念寺古墳の横口の前にも角柱状の置き石があるが、その意味も妙蓮寺山古墳の実際から判明する次第である。なお棺蓋の、左の閉塞石を受ける部分は少しく打ち砕かれており、盗掘者はここを砕いて左の石をこじあけたことが知られるが、それはまた閉塞のよく行き届いていたことを示すものでもある。この石室の築造の仕方について、M′トレンチ・N′トレンチ・Oトレンチによって検討した土層を総合すると、石室のところは、地山を一メートルばかり掘り下げて床面を作り、その上に石材を積み上げて室を構成したものであり、その石材を積む際に、側壁の石の外側は、相当広い範囲にわたって、少しずつ土を盛ってつき固めることを繰り返しながら石を積み上げたことが、N′トレンチ（図版第五の㈡）土層によって看取された。それはN′トレンチの土層は、前方部の盛り土の層は厚い軟かな層であるに対し、これは堅くて薄い数多くの層で、その各層はそれぞれ側壁の各石までぴしりととどいているからである。

六　遺　物

この古墳に関する遺物は、先年美多氏が内部を清掃された際に採集されたもの、今回の調査で石室内から検出されたもの、今回墳丘から検出されたものとがあるが、便宜上これを一括し、墳丘から検出の遺物と石室内から検出の遺物に区分してあげることとする。

〔墳丘から検出の遺物〕

1　埴輪円筒破片　　多数

2　須恵器破片

Lトレンチ出土高坏脚一　　短頸壺蓋一

Hトレンチ出土坏底部一

3　弥生式土器破片

A_2トレンチ出土底部二

Gトレンチ出土底部一

Kトレンチ出土底部一

その他

4　土師器破片

Fトレンチ出土壺または高坏の口縁一

Iトレンチ出土壺の口縁一

その他

5　陶器破片

Gトレンチ出土摺鉢口縁一

6　五輪塔残欠

右のうち明瞭に直接この古墳に関係するのは埴輪だけで、須恵器は何れとも決し難く、弥生式土器以下は古墳とは無関係の品である。

1　の埴輪円筒は、破片の数は相当あるが、皆小片であって、全形については明らかでない。比較的小形で、円形の透しのある通常の品である。（第四図1～7・図版第一〇の㈡）

2　は須恵器を四期に区分する場合(註10)の第三期に属するものであろう。（第四図8～10）短頸壺の蓋は浅坏形の通例品である。（第四図9）Hトレンチの坏底部は縁を欠き形式不明。（第四図10）以上須恵器は、石室出土遺物と比較し、年代的に矛盾するものは認められない。

3　の弥生式土器は、A_2出土品は底経七・四センチと七・四センチと七・一センチとあり、G出土品は六センチ、K出土品は八・五センチあり、いずれも後期あるいはそれ以前のものである。末期のものではない。（第四図11～14）

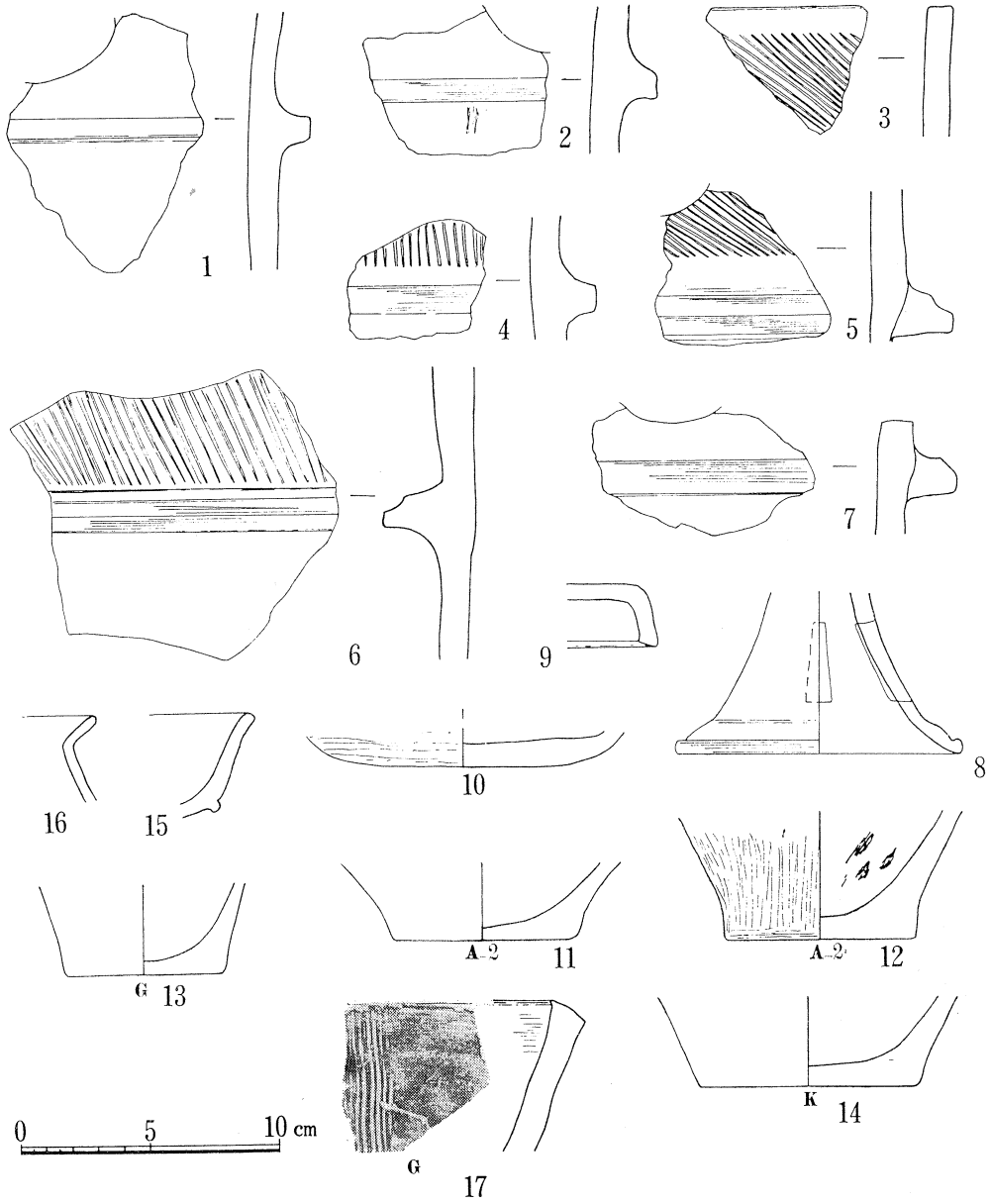
4　の土師器は、F出土品は、断面が5の字形をなす古式師器通有の形態のものである。I出土品は、頸の断面がくの字形の単純口縁の壺である。（第四図15・16）

5　の陶器は目の荒い櫛目を縦に施した摺鉢の通例品の口縁である。（第四図17）

6　五輪塔残欠はA_2区とその附近の地表面に散乱していたもので、いずれも砂岩のやや粗造のものである。

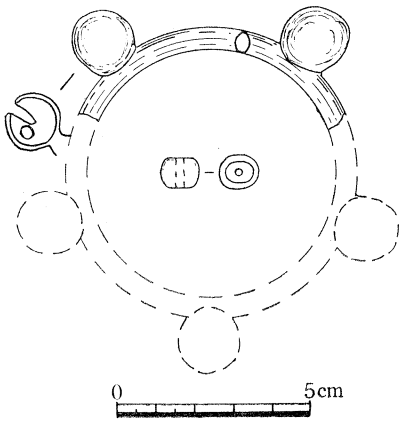
〔石室内部検出の遺物〕

1	ガラス丸玉	一
2	金銅鈴釧（すずくしろ）	一
3	大刀鉄製柄頭（円頭）	一
4	刀子残欠	一
5	鉄斧	三
6	鉄鏃	残欠多数
7	轡（くつわ）	残欠
8	鞍の磯金具	残欠一背分
9	木心鉄張壺鐙（あぶみ）	残欠一対分



第四図　墳　丘　出　土　遺　物　実　測　図

10 鉄地金銅張雲珠（うず） 二
内十脚付 一
推定六脚付 一
11 鉄地金銅張辻金具 四
12 鉄地金銅張杏葉（ぎょうよう） 四
内三葉文浮出し長心葉形品 一
無文短心葉形品 三
13 鉄製鈒具（かと） 三
14 金銅方形金具 一
15 須恵器 提瓶 一
16 同 瓢（はそう） 破片一
17 同 大形壺 破片一



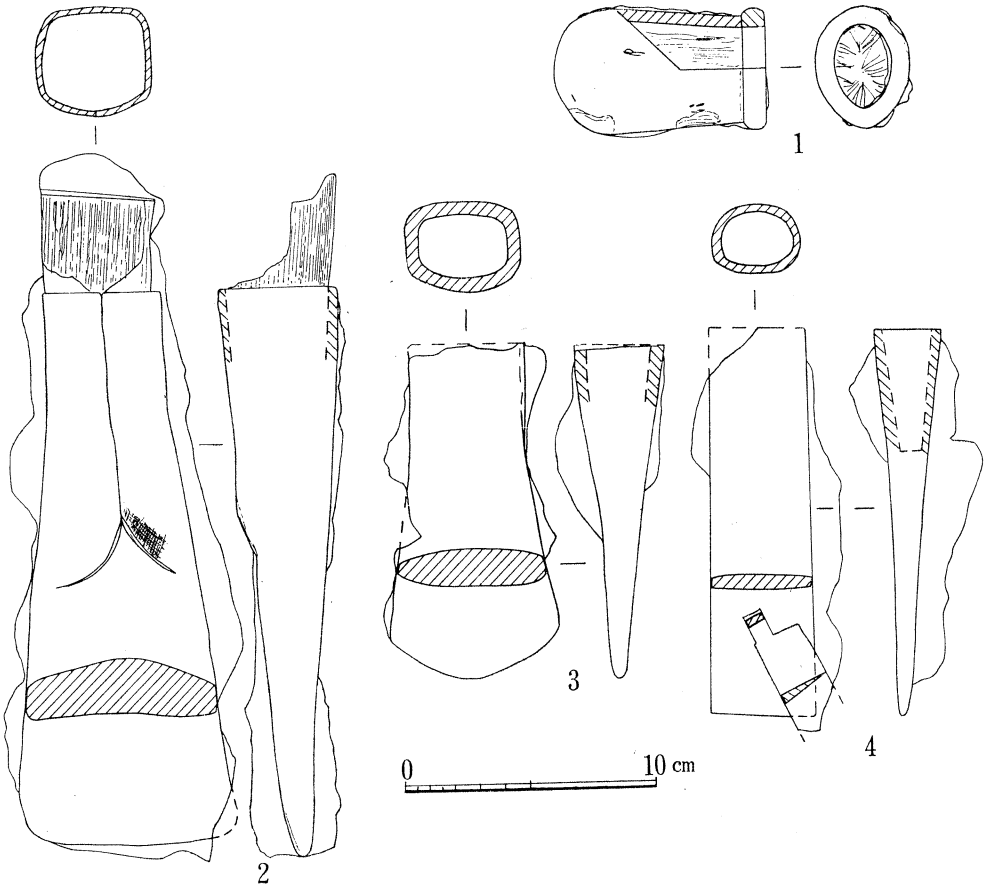
第五図　ガラス玉及び鈴釧実測図

右につき説明を加えることとする。

1ガラス玉は、直径一センチ、高さ八ミリあり、孔をあけた両面は平面に研かれている。色は濃紺色である。これは石棺の外、横口の前の所で今回発見された。盗掘の際に棺内から取り出されたものが落ちたのであろう。（第五図・図版第一一の㈠）。

2鈴釧は約三分の一の残欠で、鈴二つが残っている。輪の直径七・五センチあり、五鈴を付した通常の式のもので、鈴の径一・七センチ、厚さ一・五センチあり、環の身の幅六ミリ、厚さ四ミリあり、断面は楕円形のものである。今表面に金は見えないが、付着物の剝がれた表面は青白色の滑かな面を存しており、もと金でおおわれていたものと思われる。（第五図・図版第一一の㈡）。

3の大刀の柄頭は、長さ七・五センチ、幅五センチの円頭式で、幅九ミリの縁が附着した

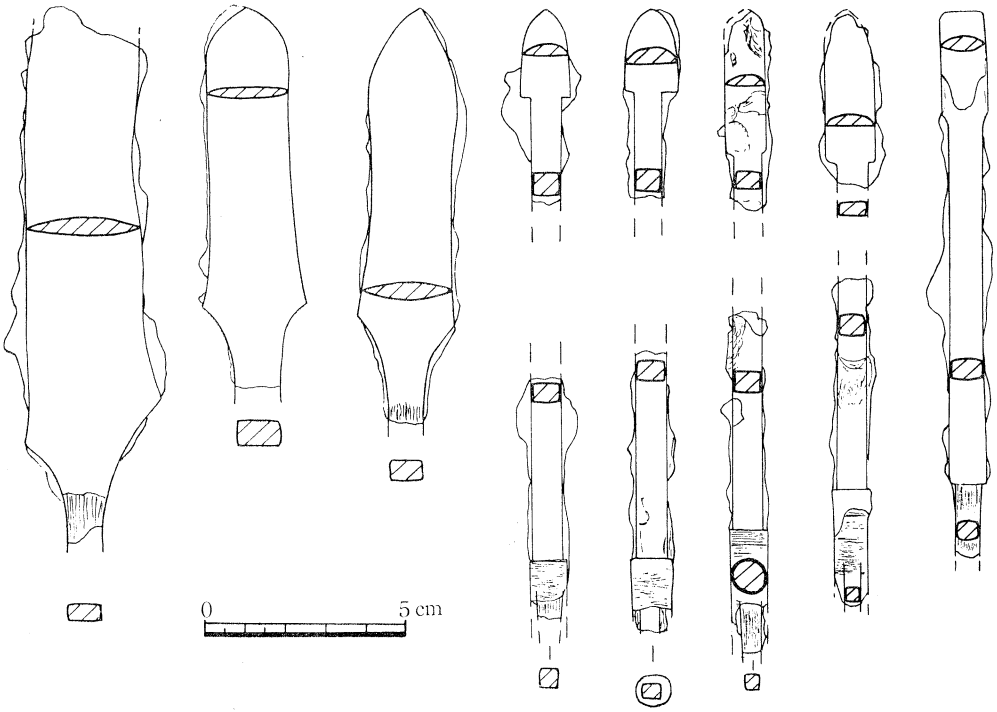


第六図　柄頭及び鉄斧実測図

ままになっている。やや厚い鉄製で、点々と銀象嵌が認められるが、鉄分でおおわれ、その文様は未だ明らかにし得ない。石棺と室壁との間から発見された。（第六図1・図版第二の㈢）

4の刀子の残欠は、後に記す第三の斧に、残片が銹着しているもので、身の幅二センチである。（第六図4）

5の鉄斧は、三個のうちの第一は、長さ二二・七センチ、本の幅四・六センチ、先の幅八・五センチあり、本から先へと直線状に広がるもので、本は完全な袋状をなし、口の形は方形に近く、この部分の厚さは三ミリばかりである。なお注意されることは、着装した木柄が四・五センチの長さで切断した形で銹で固まって遺存している。（第六図2・図版第一一の㈣左）第二の斧は本が僅かにつぶれており、現長一三・三センチ、本の幅四センチ、先の方の最大幅六・六センチあり、刃は両端に比し中央が舌状に張り出す。本の袋形の部の口は矩形に近いものである。（第六図3・図版第一一の㈣右）第三の斧は、長さ一五センチ、本の幅四センチ、先の幅四・三センチ、平面形は短冊形であり、本の



第七図　鉄　鏃　実　測　図

袋部の口は楕円形である。（第六図4）

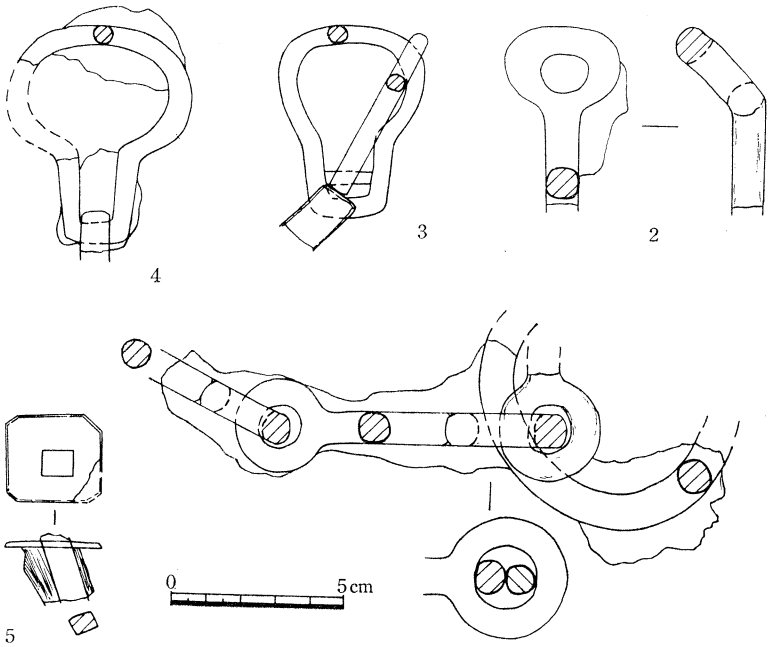
6の鉄鏃は平根と細形と両様あり、平根の方も大小両種あって、両者とも剣形の先をもつものであるが、大形の方は刃部の幅三センチ刃部の長さ一〇・八センチに及ぶものがある。小形の方は幅二センチ、刃の長さ七・五センチばかりある。両者ともに逆刺はない。（第七図・図版第一二の㈠上段右）次に細形の方は、鑿形のものが一個あり、刃部の幅一・一センチ現長一三・五センチある。その他はスペード形で刃の長さ三・六～二・二センチの片丸造りのものが二二本あり、この種のものが大部分を占めたことが察せられる。大抵は篦被のあるものらしいが、完形品がなく明らかでない。いずれにしろ、後期古墳に通例見られる長い茎をもつ式のものである。（第七図・図版第一二の㈠・㈡）なお後記の第二種の杏葉に銹着した鏃の束が認められ、一一本あるが、先端を欠失しているので形式の組み合わせはわからない。

7の轡は、引手の断片一、喰みの断片一等で、喰みには鉄製素環の鏡板の一部が附着しており、通例の飾りを施さぬ式のものと思われる。（第八図・図版第一三の㈠）

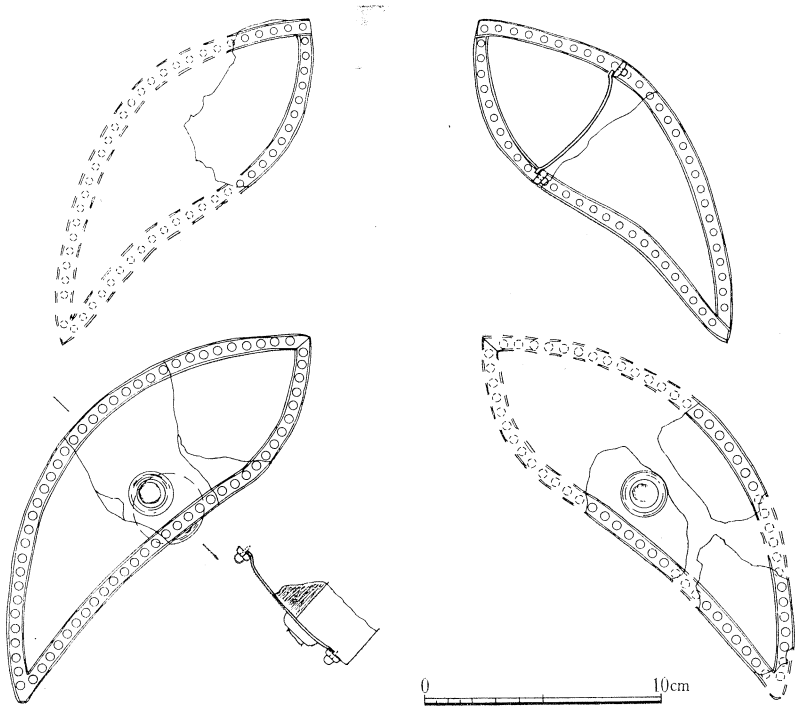
8の鞍の磯金具、これは前輪と後輪の両者があるが、いずれも欠失部分があって完全には接合出来ない。鉄地金銅張りで、銅製の縁を重ねて密に小形の鋲を打った通常の式のもので、後輪の方には金銅の円形の座金をつけた鉸具がついている。（第

九図・第八図4・図版第一三の(二)

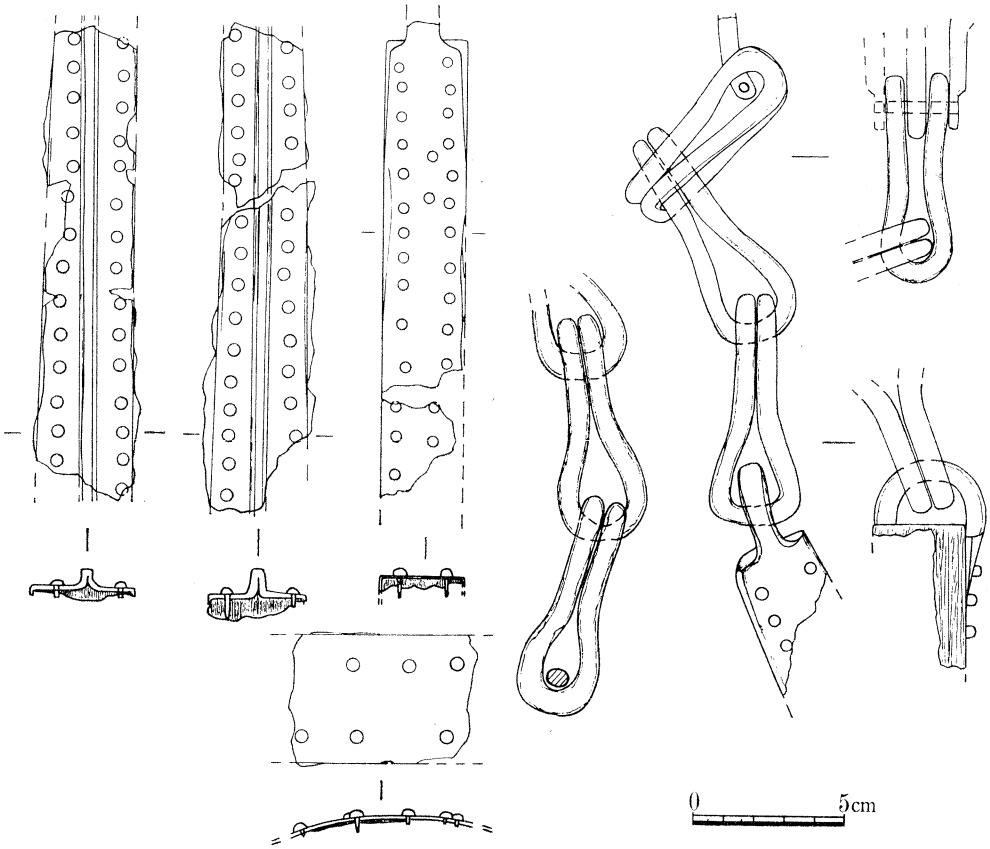
9の木心鉄張壺鐙。木心に鉄板を張って骨格とし、太い三段の鎖でつるし、鎖の上端につけた鉸具で鞍に着装する式のものであって、密に鋲を打った鉄板の断片と、鎖一対とが遺存し、鎖の上部には鉸具の一部が附着している。鎖は一段(きだ)の長さ七センチ内外のものである。(第一〇図



第八図 轡鉸具など実測図



第九図 鞍磯金具実測図

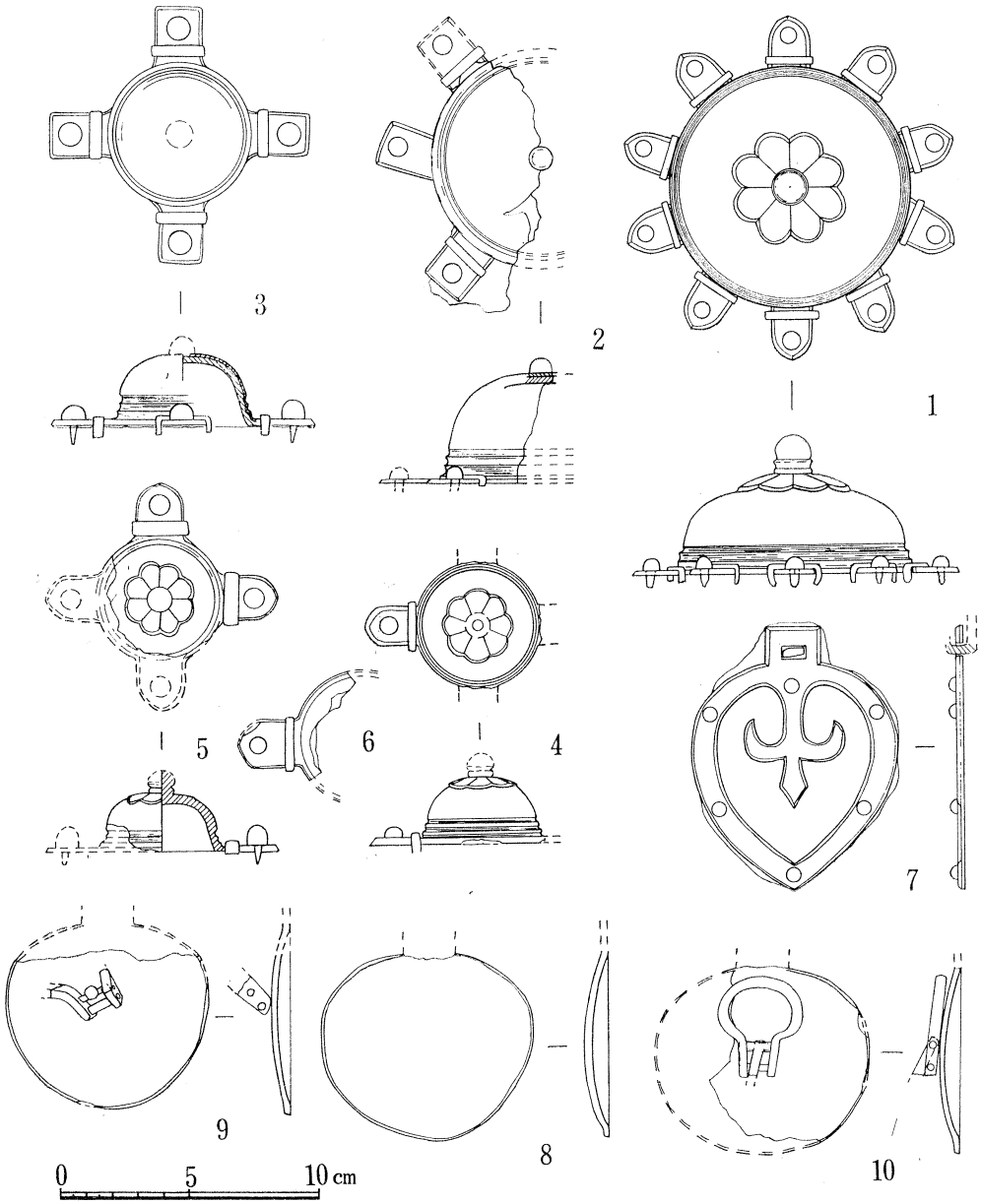


第一〇図　鐙　実　測　図

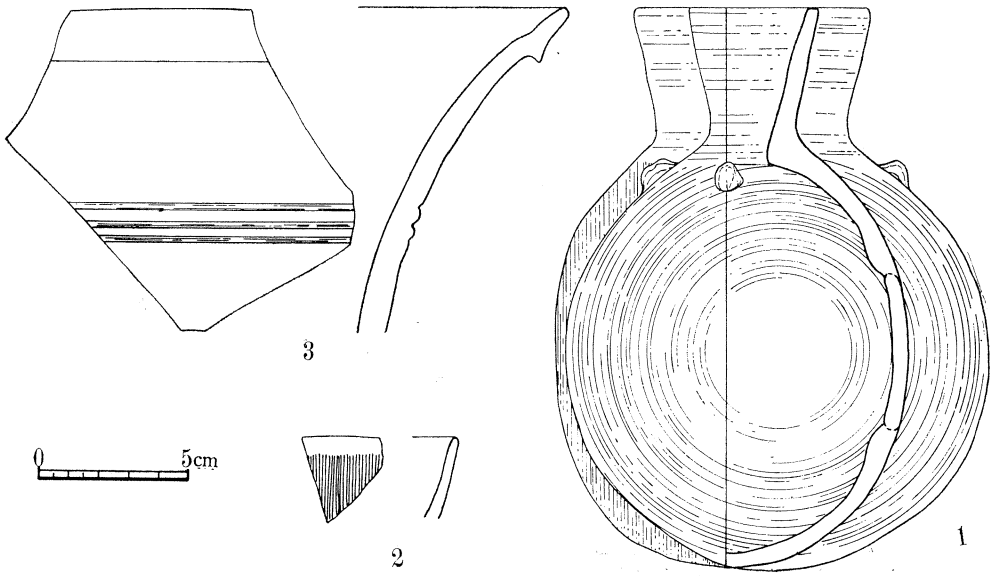
図版第一四の(一)・(二)

10鉄地金銅張雲珠。二つのうち、十脚の方は、直径九・三センチあり、裾に沈線三条をめぐらすもので、脚は長さ約二センチ、幅一・七センチあり先端は尖る。頂には八弁の花形座を打ち出した上に球形の鋲をつける。総高五・二センチあり、大形で脚の多い点が注意される。（第一一図1・図版第一五の(一)右）第二の雲珠は、個体の三分の一ばかりの残欠であるが、推定六脚のもので、直径八・二センチ・脚は矩形で長さ約二センチ、幅一・八センチ。身の高さは三・四センチあり、頂きに小形の丸い鋲を施す。花形座の有無は不明である。（第一一図2・図版第一五の(一)左）

11の鉄地金銅張辻金具。四個のうちの第一は径五・七センチ、身のみの高さ三センチ、頂部の構造は不明で、裾に沈線二条をめぐらし、脚は長さ二・三センチ幅一・八センチの方形に近いものである。（第一一図3・図版第一五の(二)左）。第二のものは、径五センチ身の頂には八弁の花形座を打ち出し鋲を施すものであるが、鋲を失っている。脚は長さ二センチ、幅一・六センチあり、先端は尖る式である。第三のものは、これと同様の品で、頂上の丸鋲が残存する。第四の品は残片で、一脚と身の一部を存するが、ほぼ第三・四と同様のものである。（第



第一一図 雲珠・辻金具・杏葉実測図



第一二図　石室出土須恵器実測図

一一図4・5・6図版第一五の(二))

12の鉄地金銅張杏葉。四個のうち第一の品は、やや大形で総長一〇センチ、幅八センチ、鉄地の全面を銅板でおおい、中央に三葉形を打ち出し、縁は幅八ミリ内外の幅を打ち出して高くし、鋲を合計六本、まばらに施したものである。(第一一図7・図版第一六の(一)右)第二・三・四の杏葉はやや小形のものであり幅約八・二センチ、高さ七・五センチばかりの横広い一種の心葉形で、中くぼみ気味のものである。第二のものは釣手の部分を欠くがその他の全形を存し、第三のものは一部を欠き、第四のものは残欠であって、いずれも全面鉄銹におおわれているが、無文であろう。縁には鋲を用いていないようである。(第一一図8・9・10・図版一六の(一)左)

13の鉸具。三個二種あり、第一の品は、全長五・五センチあり(図版第一四の(三))第二は全長四センチあり、第三もこれと同種であるが残欠である。(第八図3・図版第一三の(二)下)

14の金銅方形金具は、幅二・五センチの隅を切った方形の品で、中央に鋲を施し(笠を失う)、裏に木が附着している。木の木目の方向すなわち座金に対しやや斜めに鋲をうちこんだものである。(第八図5)

15須恵器提瓶。高さ八・六センチ、口径六・一センチ、頸径四・八センチ、胴径一四・二センチ、同厚さ一一・八センチあり、胴はかなり偏平で本来の形を保ち、口は直口の単純な式であり、耳は瘤耳(こぶ)である。このような形のものは第三期にはすでにあらわれているものである。(註11)(第一二図1・図版一六の(二))

16の瓏は口辺の小片であるが、縦に密に篦描きの平行線を描く式のものであるが、この種の文様を施した瓏は、出雲地方では比較的稀に見られるもので、すこぶる大きく開いた口に長くて強く縮約した頸をもち、肩から胴の沈線はきつく段をつけて施すタイプに属するものに限って用いられる文様である。この型のものは、第三期にすでに口頸部の文様を省略するものもあり(註12)この品は文様をもつ点から推して第三期のものであろう。(第一二図2)

17の大形壺の破片は、口縁部の小片であるが、肩のよく張った胴に、高く大きく開いた口のつく式のものの口縁で、自然釉のために文様が見えないけれども、その作りはきやしやな優美さを失っておらず、かなり強く傾斜しつつ大きく口を開くもののようであり、やはり第三期のものかと推測される。(第一二図3・図版第一六の(三))

七　結　語

妙蓮寺山古墳およびその出土品は概略右の通りであるが、なおその年代と資料的意義について述べることとする。

まずその年代は、今余り細かに論ずることは困難ながら、ほぼいわゆる古墳時代後期の中葉ともいうべき時期に属するものといってよいであろう。後期型古墳の時期的位置を考えるには、後期古墳通有の副葬品である須恵器の型式を目安とすることがもっとも便利であるが、本古墳は早く盗掘された古墳であるため、須恵器の資料が不十分であるので、諸種の点を綜合的に考慮して、その大体を推測し得るに過ぎない。

まず第一に墳丘の形状を見るに、その規模からいえば長さ五〇メートルに近く、この地方としては相当に大きなものであるが、その前方部は後円部よりも三メートル以上も高く、整った前方後円墳に比べれば極めて異常のものであり、山陰には余りその例が知られないが、他地方の後期古墳には間々その例のあるものである。次に内部構造は、まずその石室の形式についていえば、いわゆる両袖形の整った形のものであるが、大形の石を積んで壁を構成するものであって、後期に通有のものといってもよい。附近では大念寺古墳などに類し、また切石と割石の相違はあるが、築山古墳などにも通じる形である。次に石棺も横口をもつ点が注意されるけれども、出雲ではむしろその点はありふれたものであり、その他の点では各地の後期古墳に通有の形態をそなえている。

以上、墳形や内部構造において、いわゆる後期古墳としての通性がみられるが、遺物について今少しく注意して見る。まず比較的珍らしい例として鈴釧が挙げられる。山陰の出土例としては、島根県浜田市治和町のめんぐろ古墳(註13)同平田市上島古墳(註14)の二例がある。前者は鉄地金

銅張りf字形の鏡板・金銅三輪玉などを伴出し、須恵器は古墳時代須恵器を三期に区分する場合の第二期のものと伴っている。後者は五鈴鏡、鉄地金銅張りのf字形鏡板、同様の結紐状の杏葉、第三期の須恵器と伴出している。これら僅かに二例であるが、山陰で須恵器の第二期乃至三期のころに行なわれている事実が明らかであるが、第二期（福岡県桂川町王塚古墳などにほぼ平行する時期と考えられる。）には横穴式石室は漸く山陰にあらわれ始めるころと考えられる時期であり、第三期は横穴式石室・家形石棺・横穴など、いわゆる後期型の内部構造がもっとも盛んに行なわれた時期である。

次に鐙であるが、このような形式のものは山陰では未だ他の例が知られていないようであるが、岡山県津山市中宮第一号墳(註15)でf字形鏡板、須恵器（山陰の第二乃至第三期に属するもののようである）おおむねと伴出していることや、福岡県桂川町王塚(註16)から出土していることなどが参照される。

鉄製の円頭大刀の柄頭は、やや似たものが、松江市岡田山古墳に出土例があり、同古墳の須恵器は第三期であることが注意される。

雲珠・辻金具等はいずれも鉄地金銅張りで、頂きに花形座のある球形飾りをつけるもので、松江市岡田山古墳、出雲市築山古墳、同放れ山古墳などその例の多い式のものである。その他鉄地金銅張りの鞍金具等もこれらの古墳に通有の品である。鉄地金銅張りの杏葉で三葉形を附した式のものは、滋賀県水尾(註17)にほぼ似たもの出土していることも注意される。（水尾出土の須恵器は山陰の第二期乃至三期に近いものと思われる。）

最後に須恵器であるが、ほぼ完全な提瓶一つと、甕の口縁一片と大形壺の口縁一片しかないので、これを以てその時期を断定することは躊躇される。しかしこれらを通じての様相は、第三期と考えてほぼ矛盾した点は見出されないようである。

以上のような遺物に関する諸点を考慮すると、この古墳の時期は、古墳時代後期の中葉ごろ、すなわち須恵器の形式でいえば第三期ないし、それに極めて近いころと考えて差支ないであろう。

次にこの古墳の、この地方における資料的意義について、若干を指摘しよう。まず古墳の墳丘の規模について、出雲国内のやや大きな前方後円墳と前方後方墳をあげると次のようである。（長さだけ示す）

松江市山代二子塚（前方後方）　九〇メートル

○出雲市今市大念寺古墳（前方後円）　八四　〃

松江市手間前方後円墳（前方後円）　七〇〃
松江市朝酌魚見塚（前方後円）　六二〃
簸川郡斐川村岩船山古墳（前方後円）　五五〃
出雲市東林木大寺古墳（前方後円）　五二〃
出雲市下古志妙蓮寺山古墳（前方後円）　四九〃
松江市竹矢岩船古墳（前方後方）　五〇〃
○松江市坂本薄井原古墳（前方後方）　五〇〃
安来市荒島造山二号墳（前方後方）　五〇？〃
飯石郡三刀屋町松本一号墳（前方後方）　五〇〃
松江市乃木二子塚（前方後方）　四〇〃
○八束郡宍道町椎山古墳（前方後円）　四〇〃

（以下より小形のもの省略）

右のうち明瞭な後期古墳は○印をつけた大念寺、妙蓮寺山、薄井原、椎山の四基であって、後期においては、神戸川の流域に二基もあることが注意される。そして墳丘の上でいうと、大念寺古墳が神戸川右岸の大将とすれば、妙蓮寺山古墳は左岸の大将ということになる。もちろん、石室の規模・精粗も問題であり、また右岸には、直径四〇メートルの円墳で、壮大整美な石室・石棺をもつ上塩冶築山古墳の如きがあるが、それにしても、妙蓮寺山古墳は神戸川左岸の王座を占める古墳であることに変りはない。出雲の国の古墳時代後期には、神戸川方面に著しい古墳が集中していることを前にも記したが、そうした中において、妙蓮寺山古墳がこのような地位を占めていることは、当代の地方豪族の地域的なあり方を考えるには重要な目安になるであろう。

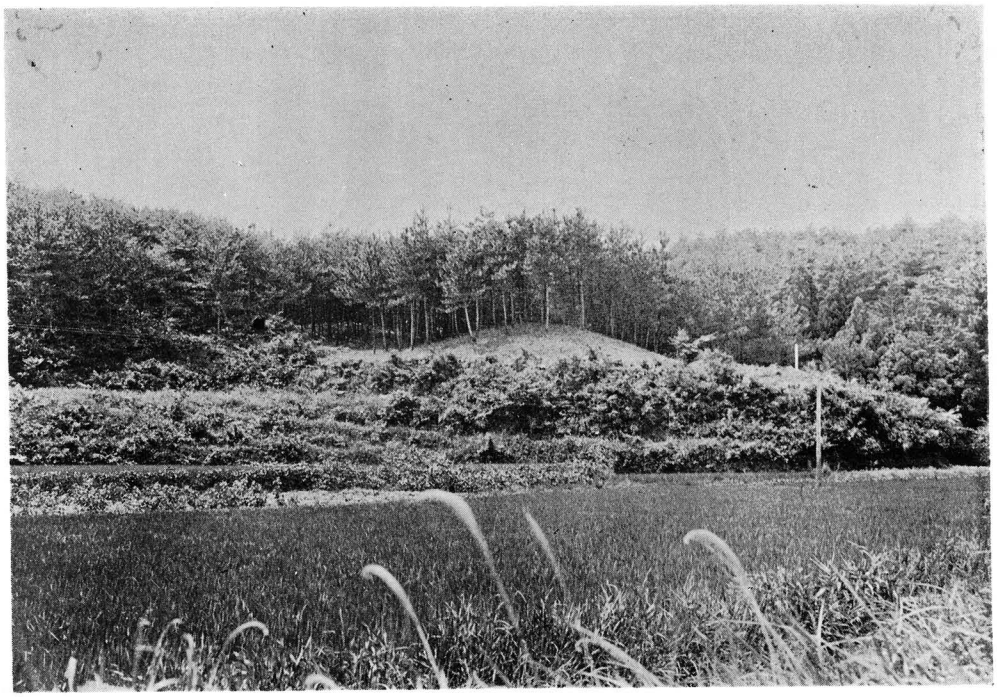
次に内部構造の方面について見ると。玄室戸口に二枚の切石を観音開き状に置いて閉塞する手法は、朝鮮の古墳(註18)にその典型的なもののあることも注意され、もちろん直接のつながりではないにしろ構造の系統上の問題についても示唆するようである。次に石棺の横口の閉塞状況を明示した例として、たとえば、類似の横口をもつ大念寺古墳の、横口の前に置かれた角柱状の石のもつ意味が、本古墳の実例によって、はじめて明確に説明されることなども見のがし難いことである。

以上、妙蓮寺山古墳は既に盗掘された古墳であったけれども、今回の調査により種々の具体的な事実が判明したのであって、調査主催者の企図も、ほぼその目的を達したものと思う次第である。

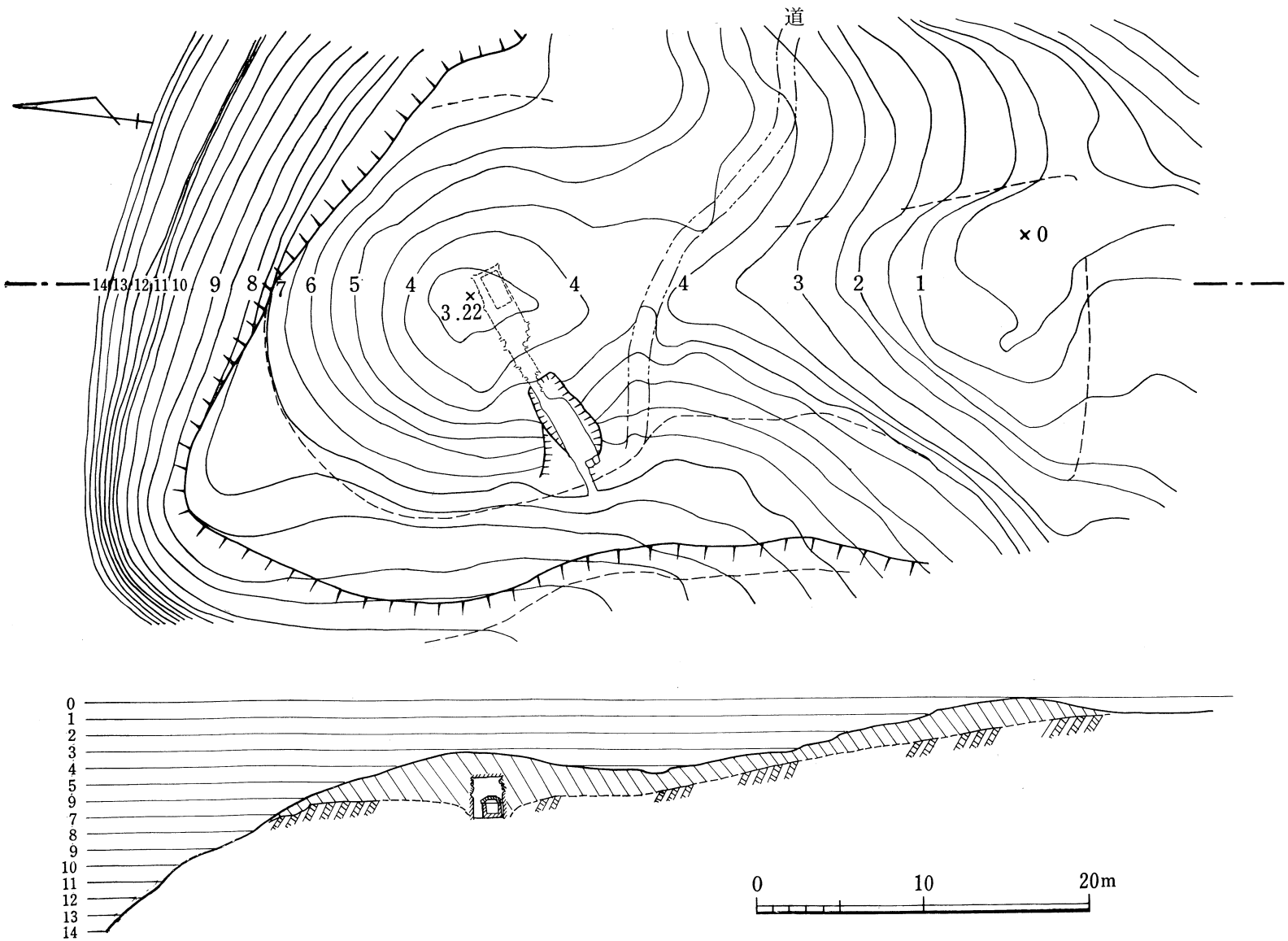
註

1 梅原末治「丹波国南桑田郡篠村の古墳」(考古学雑誌第九巻一号)。島根の文化財第三集。
2 池田満雄「小坂古墳」(出雲市の文化財第一集)。
3 出雲市誌。島根の文化財第三集
4 山本清「大梶古墳調査報告」
5 池田満雄「井上横穴群」(出雲市の文化財第一集)
6 梅原末治「出雲に於ける持殊古墳中ノ下」(考古学雑誌第一一巻三号)。出雲市の文化財第二集
7 梅原末治「出雲に於ける持殊古墳中ノ上」(考古学雑誌第九巻五号)。島根の文化財第三集。出雲市誌。
8 梅原末治「出雲に於ける持殊古墳中ノ上」。島根の文化財第三集。出雲市誌
9 梅原末治「出雲に於ける持殊古墳中ノ上」。島根の文化財第三集
10 山本清「山陰の須恵器」(島根大学開学十周年記念論集)
11 たとえば、山本清「山陰の須恵器」に示した松江市持田町常熊古墳出土品等の如きはそれである。
12 右の常熊古墳出土品には、この種の無文化したものが見られる。
13 山本清「浜田市めんぐろ古墳遺物について」(島根大学論集(人文)七号)
14 池田満雄「出雲上島古墳調査報告」(古代学研究一〇号)。島根の文化財第三集
15 近藤義郎「佐良山古墳群の研究」
16 京都帝国大学文学部考古学研究報告第一五冊
17 同　第八冊
18 たとえば湖南里第一号墳・内里第一号墳(朝鮮古蹟研究会「昭和十一年度古蹟調査報告」)の如きもの。

図版第一　妙蓮寺山古墳全景

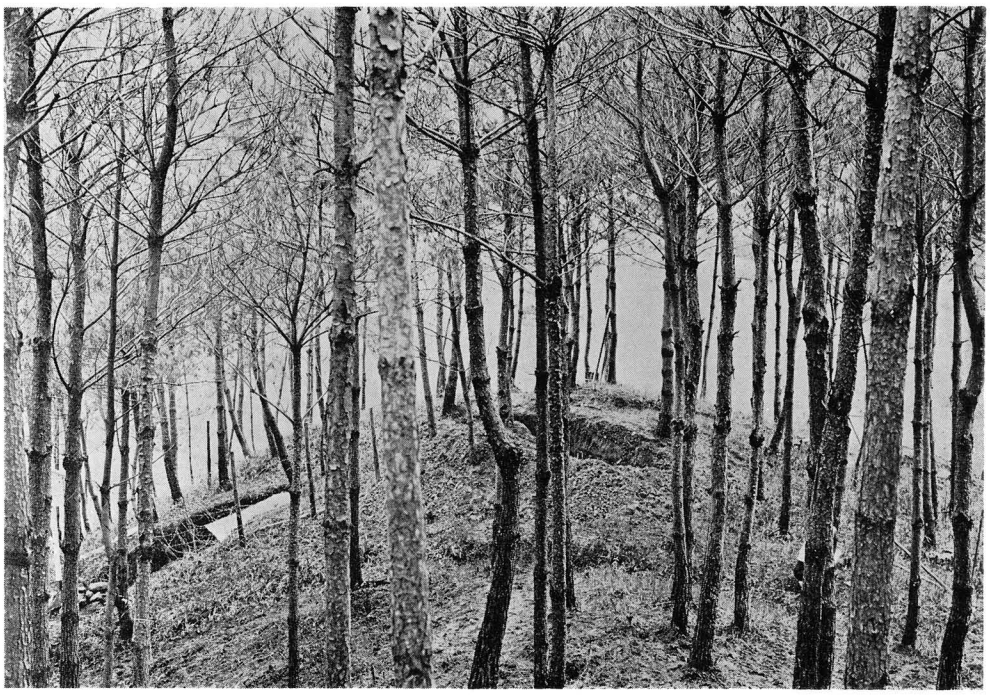


北東から望む（中央は後円部，その左松林の中が前方部）


道
14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4
3.22
4
4
3 2 1
×0
0
1
2
3
4
5
9
7
8
9
10
11
12
13
14
0 10 20m

図版第二　墳丘実測図

図版第三　墳丘

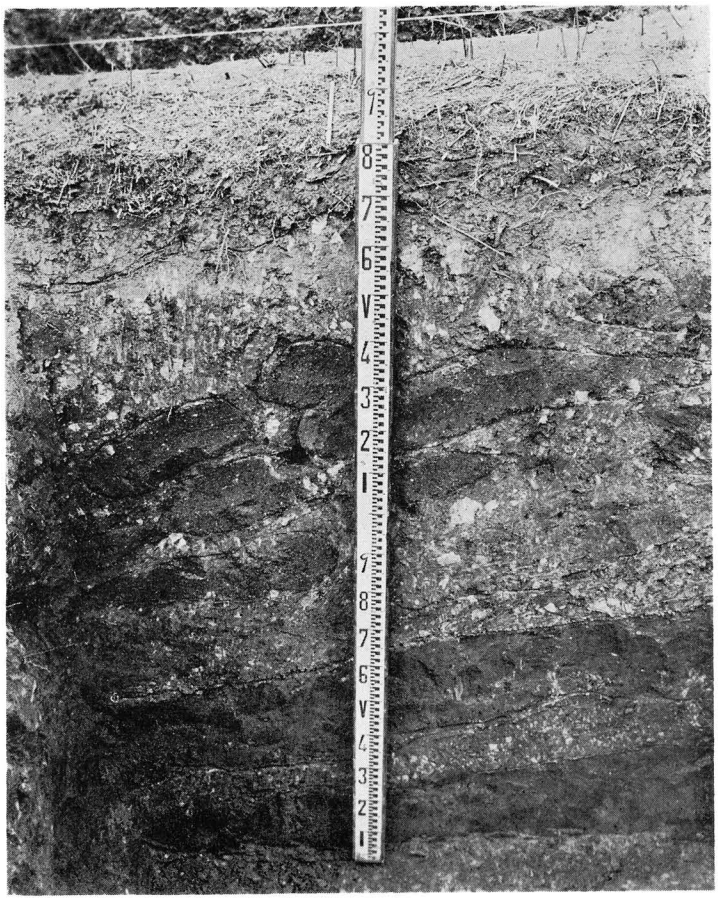


㈠ 前方部から見た後円部

㈡ 後円部から見た前方部

図版第四　前方部の状態

(一)　上面の埴輪片



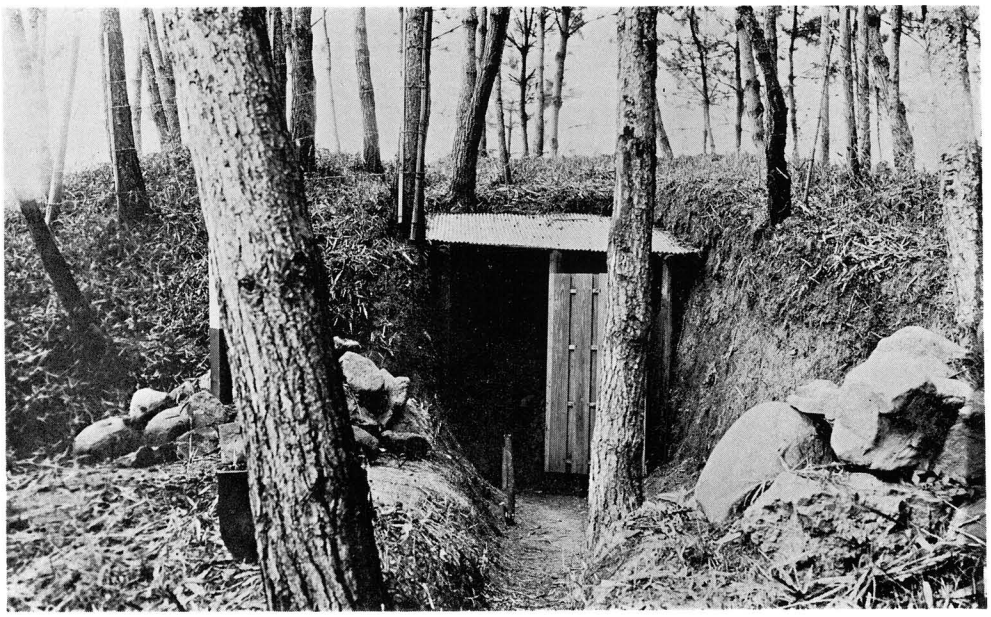
(二)　A_2トレンチ東壁の土層

図版第五　墳丘盛り土の状態

(一)　前方部A₂トレンチ南壁

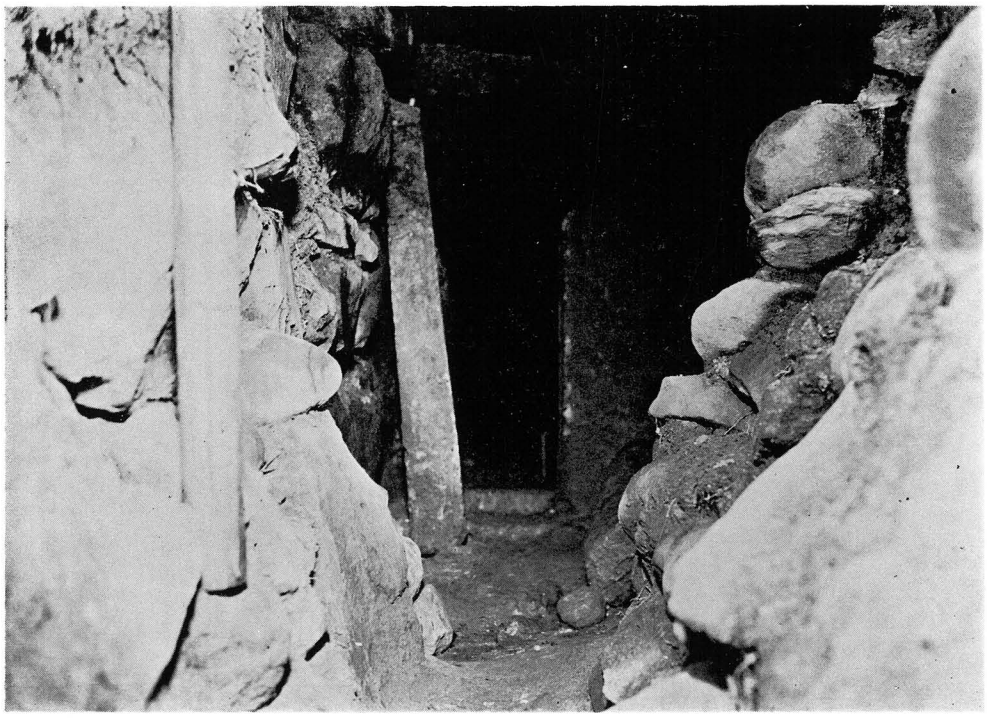
(二)　後円部Nトレンチ北方から見る

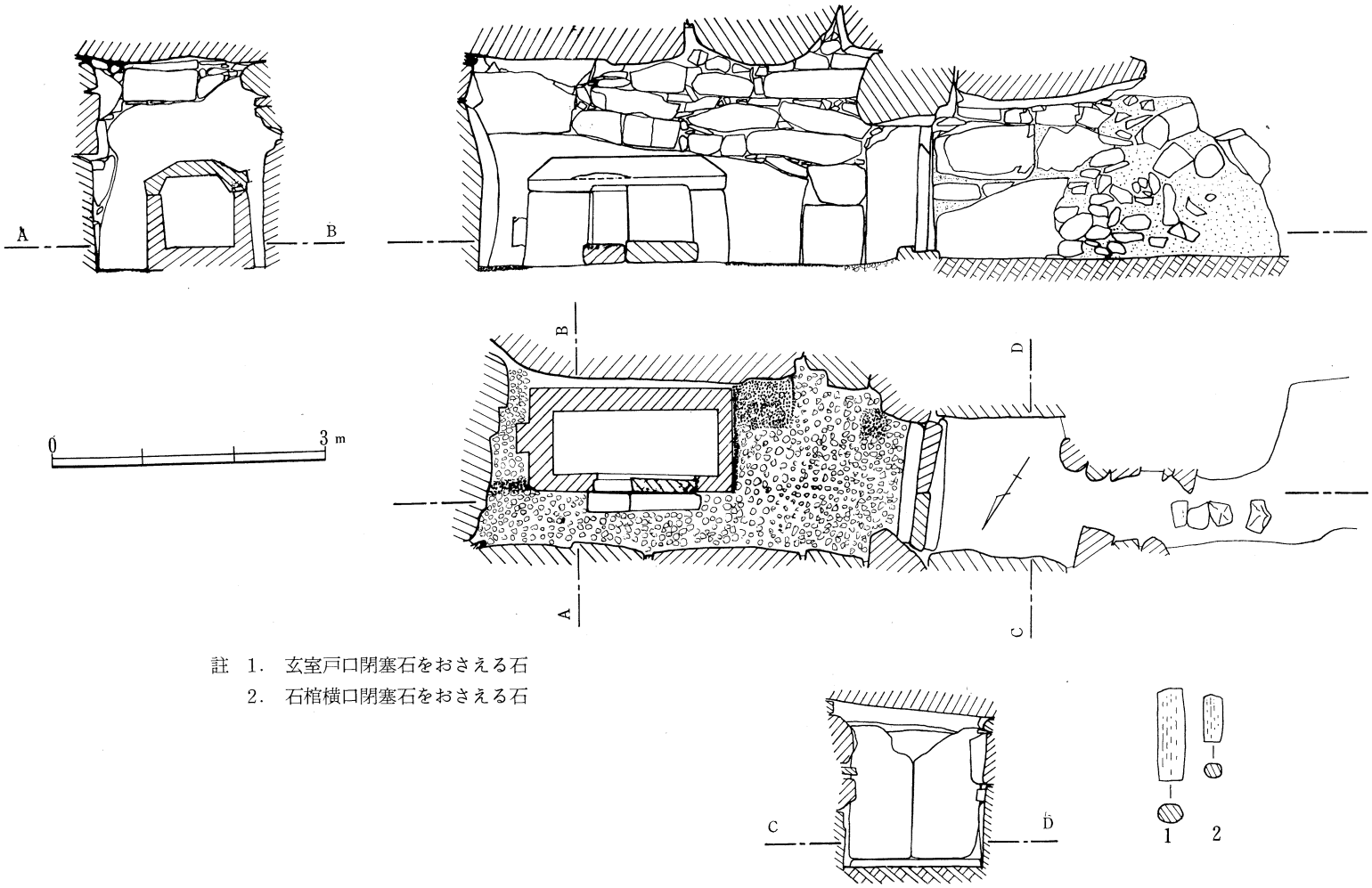
図版第六　石室前面



(一) 石室前面

(二) 羨道部および玄室戸口



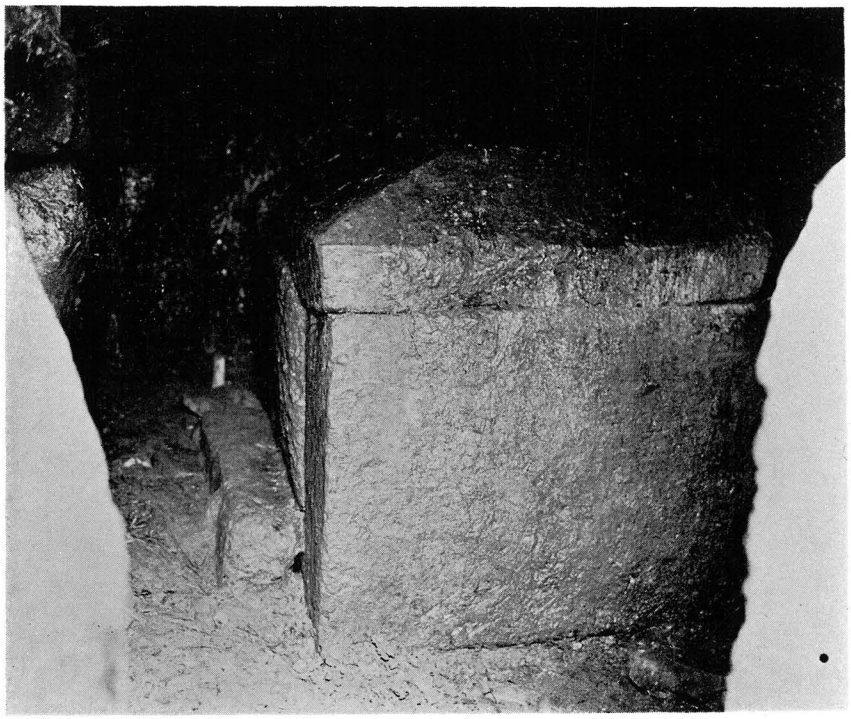


註　1.　玄室戸口閉塞石をおさえる石
　　2.　石棺横口閉塞石をおさえる石

図版第七　石室実測図

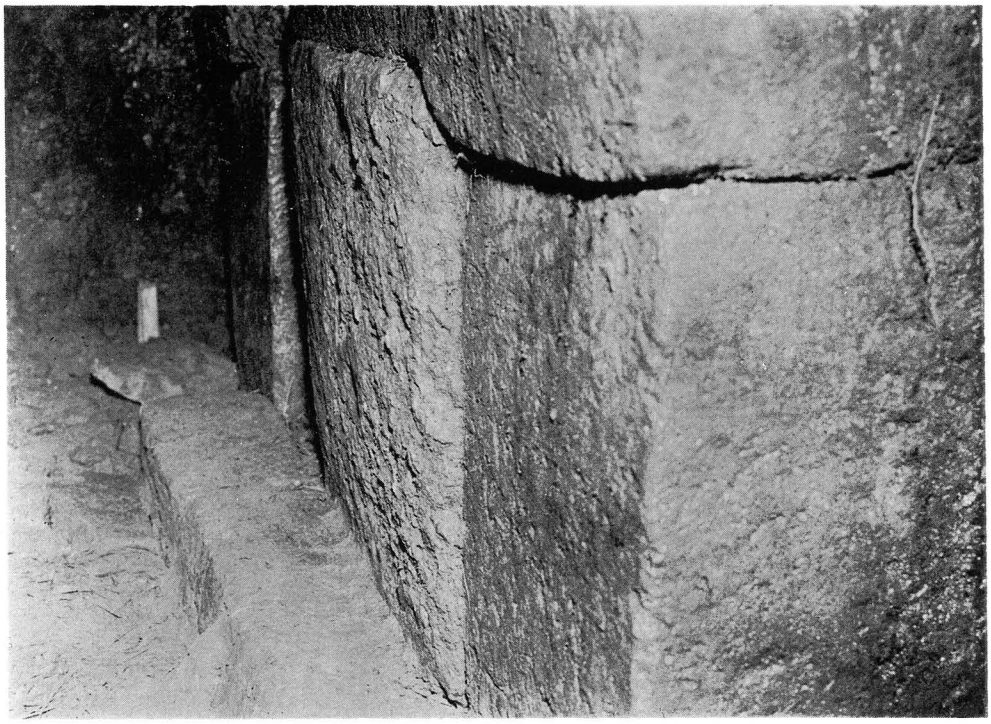
図版第八　石室

(一) 玄室戸口の状態



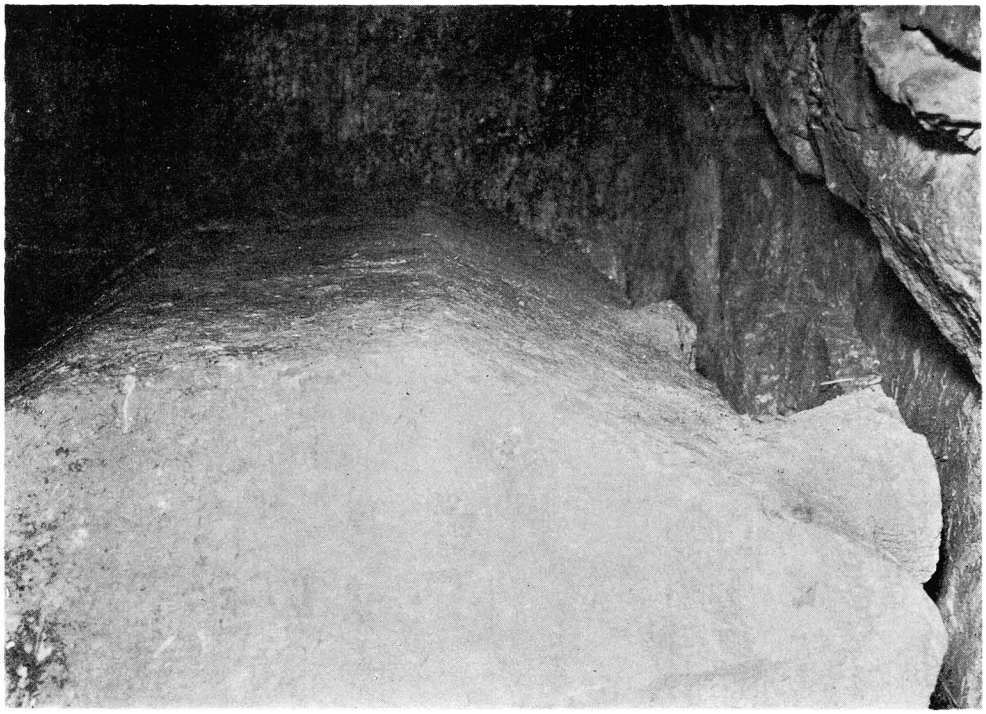
(二) 玄室内部

図版第九　石　棺

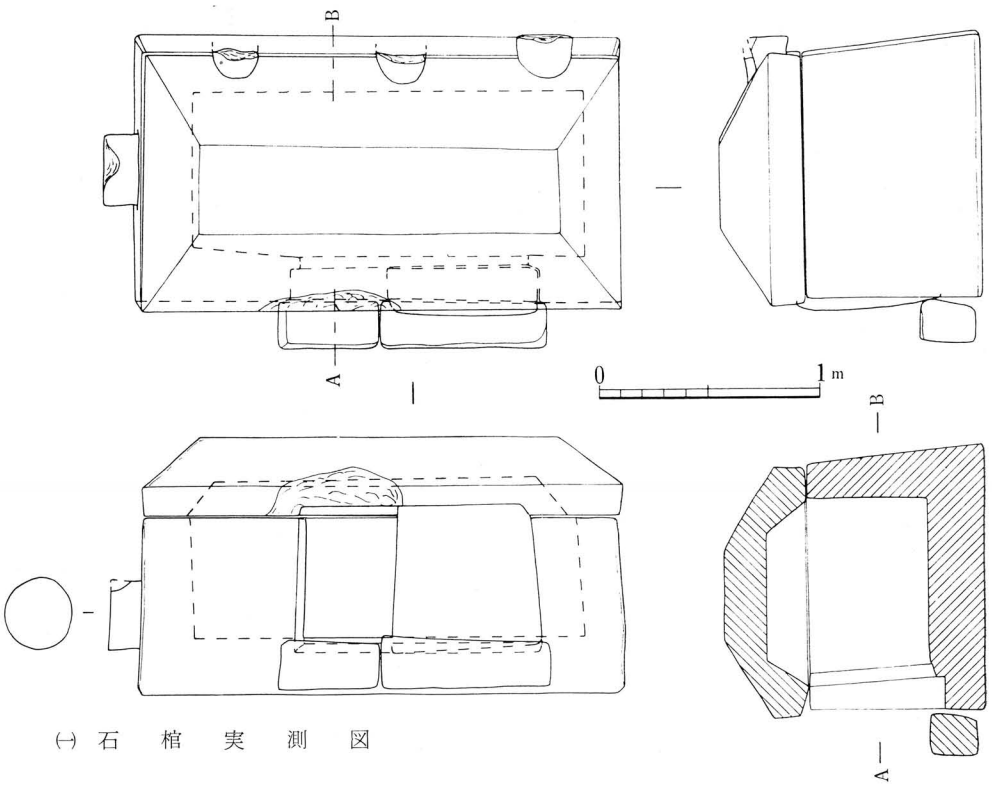


(一) 横口閉塞状態

(二) 石棺蓋石

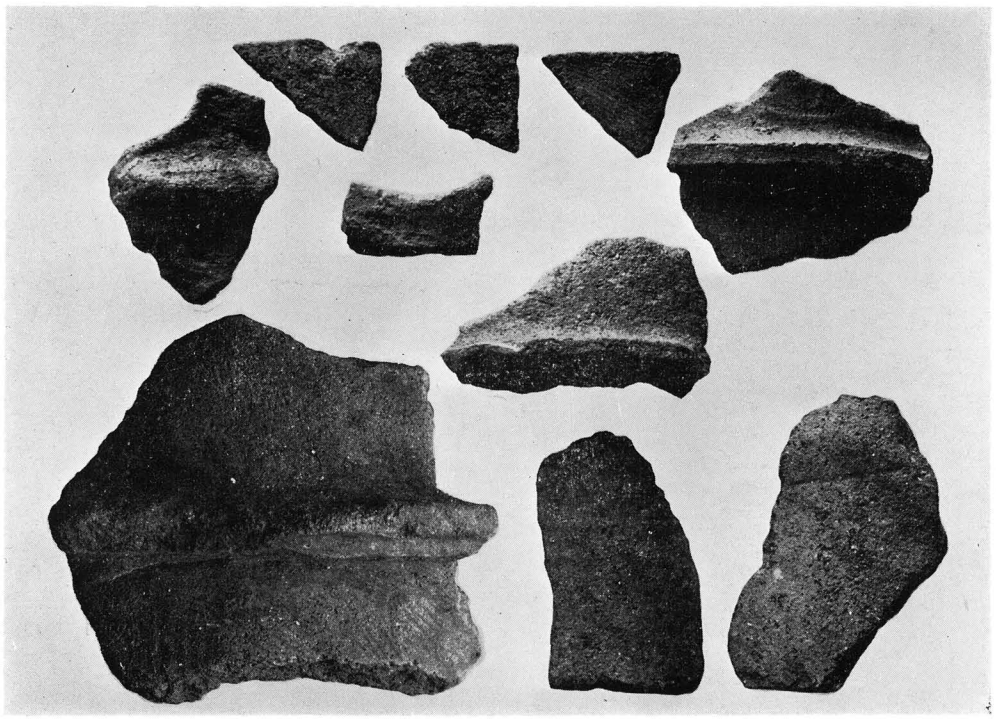


図版第一〇　石棺実測図および埴輪

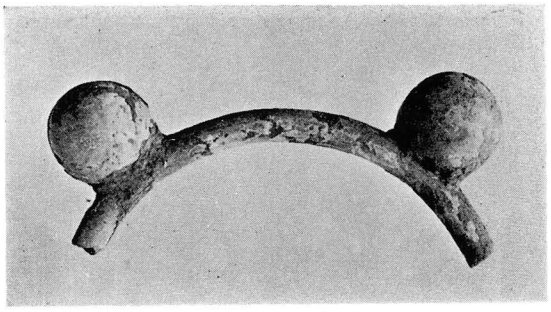


(一) 石　棺　実　測　図

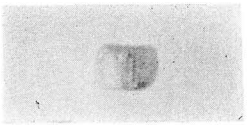
(二) 埴　　輪



図版第一一　ガラス玉・鈴釧・柄頭・鉄斧

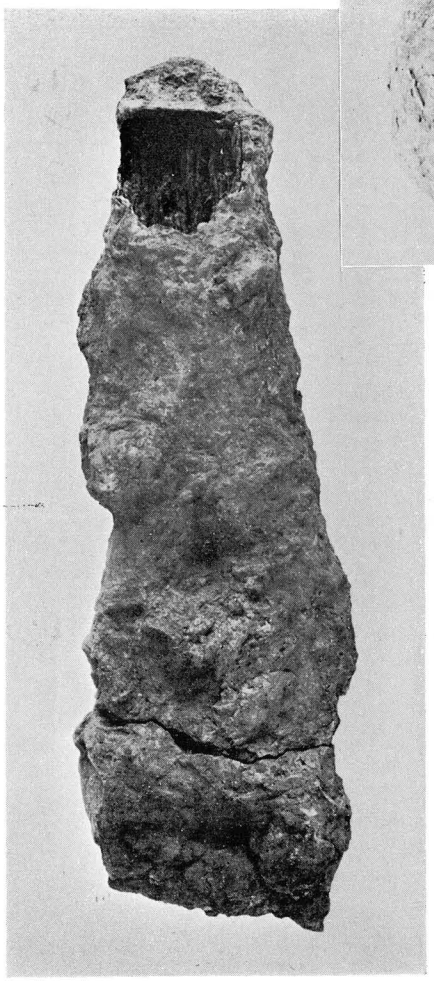


㈡　鈴　　釧

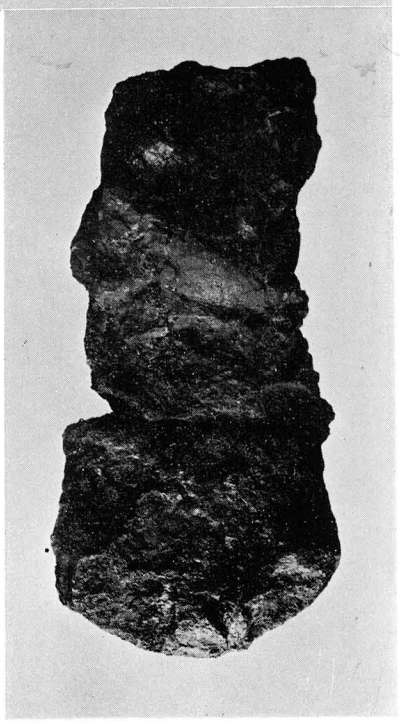


㈠　ガラス玉

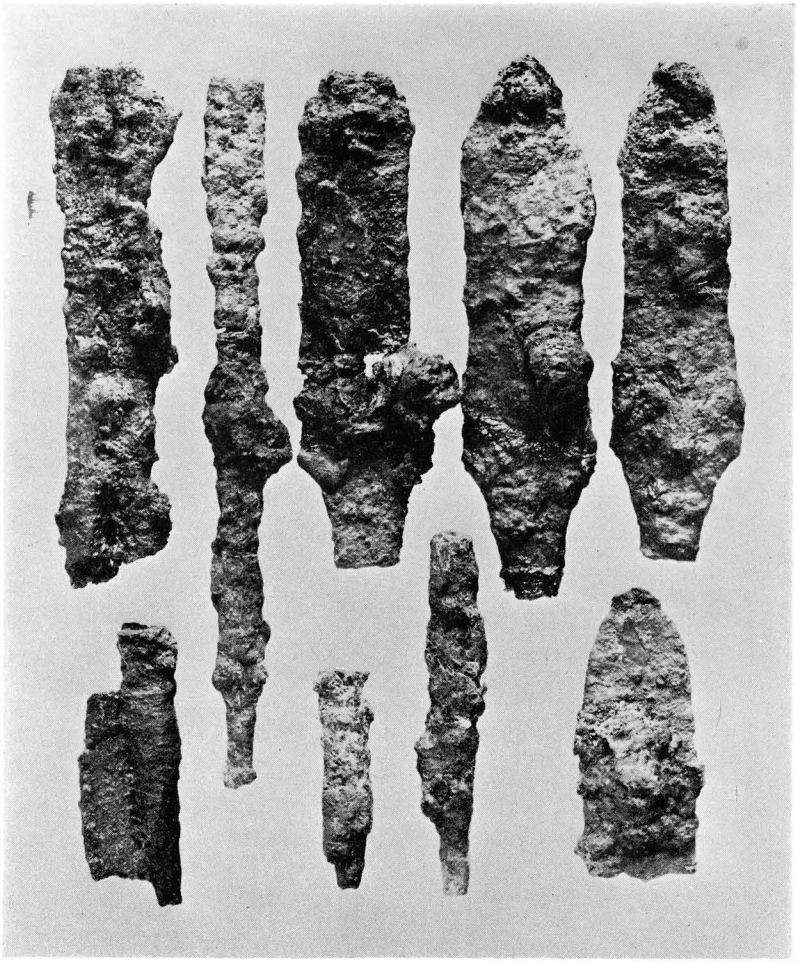
㈢　柄　頭

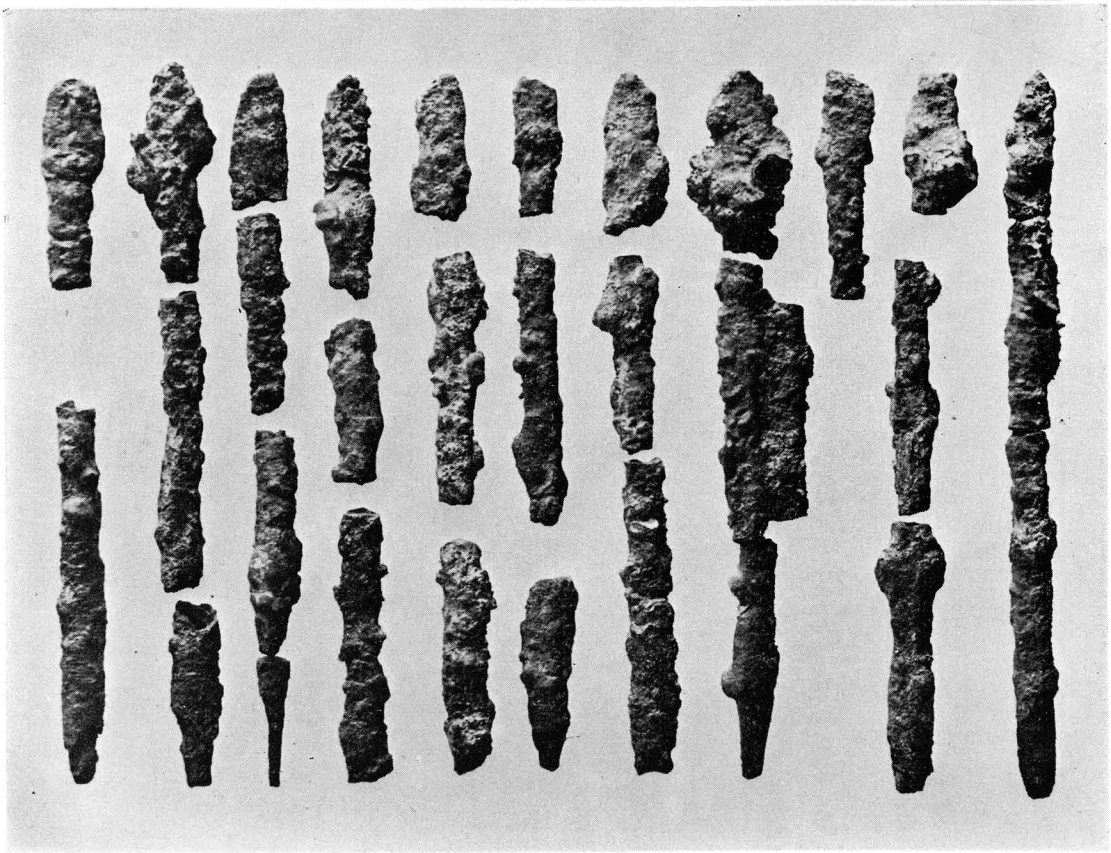


㈣　鉄　斧

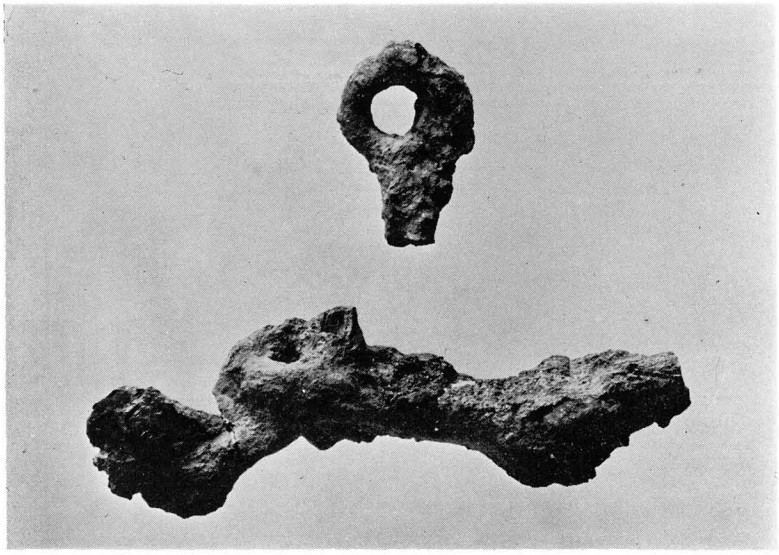


図版第一二　鉄鏃



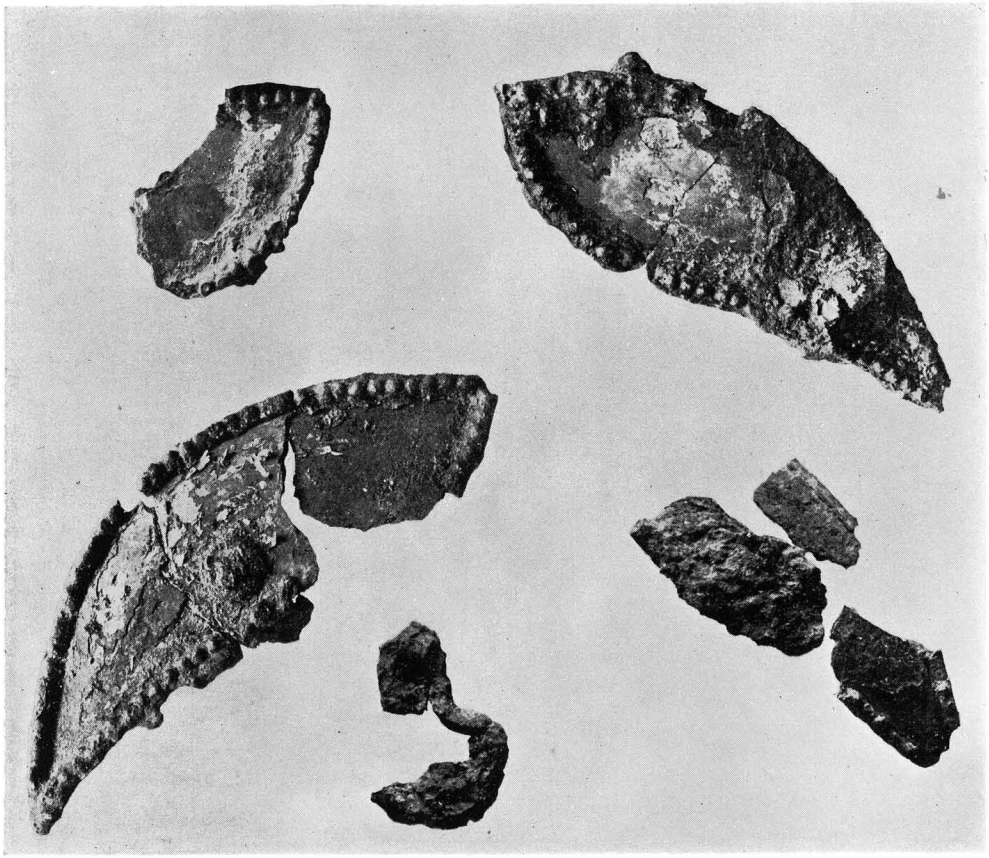


図版第一三　馬具　轡および鞍磯金具

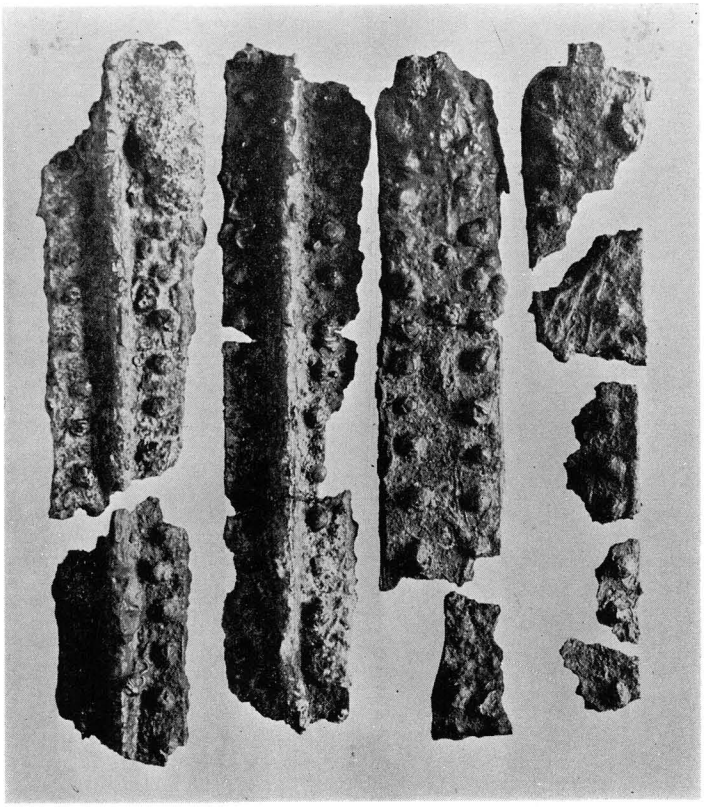


(一) 轡

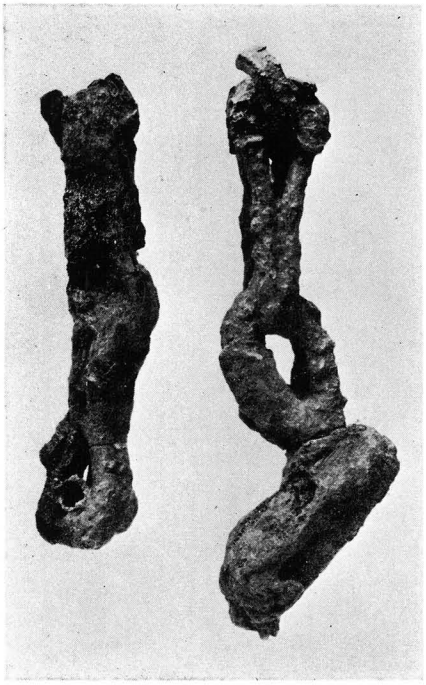
(二) 鞍　磯　金　具



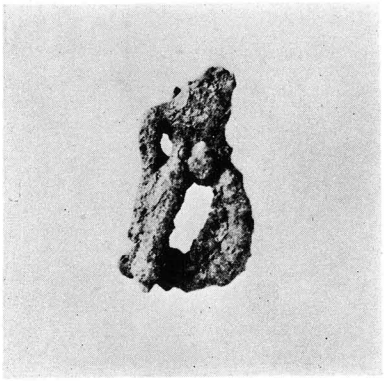
図版第一四　馬具　壺鐙および鎖・鉸具



㈠ 壺　　鐙

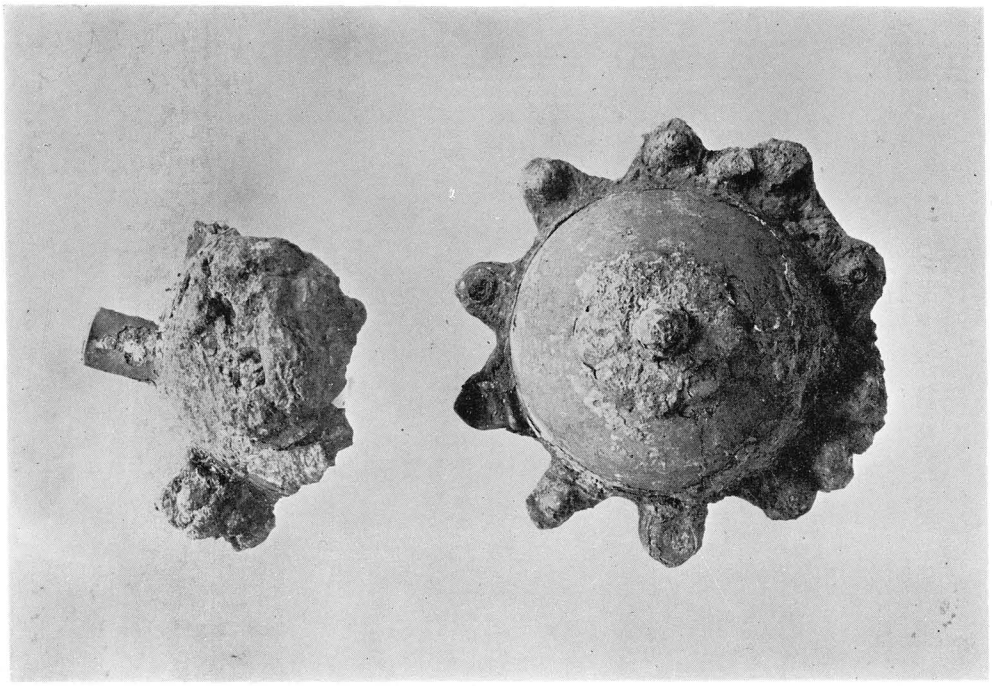


㈡ 鎖

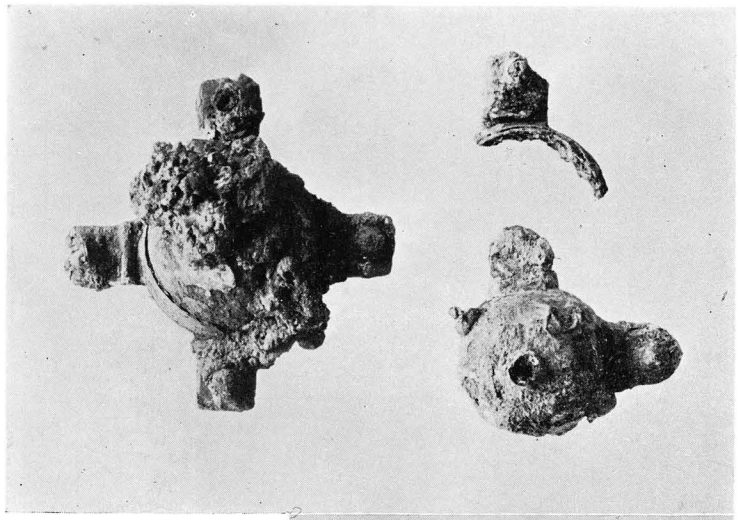


㈢ 鉸　　具

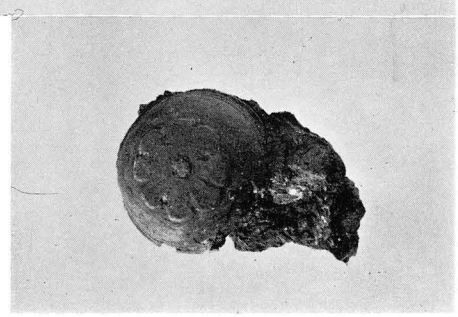
図版第一五　馬具　雲珠および辻金具



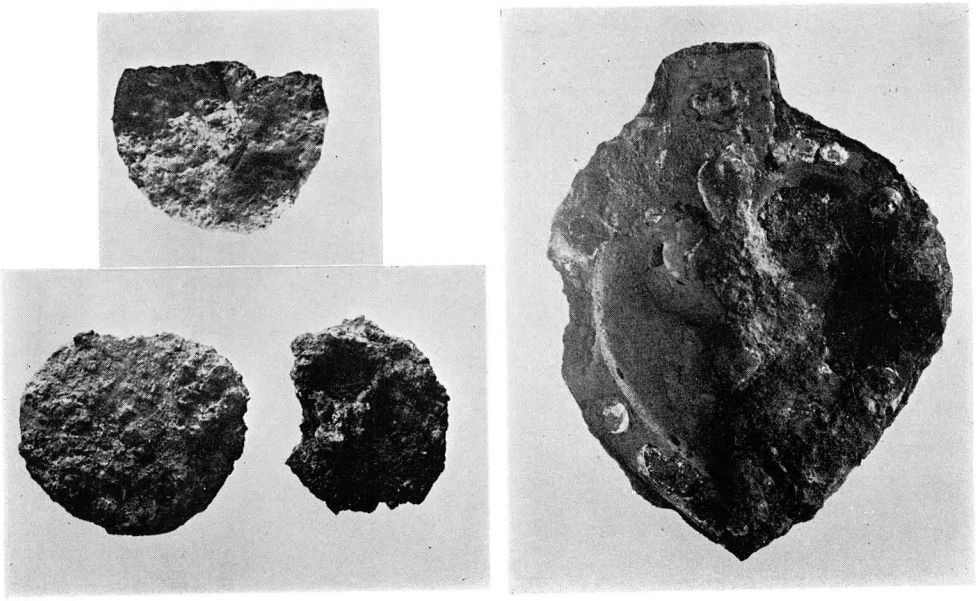
(一) 雲　　珠



(二) 辻 金 具

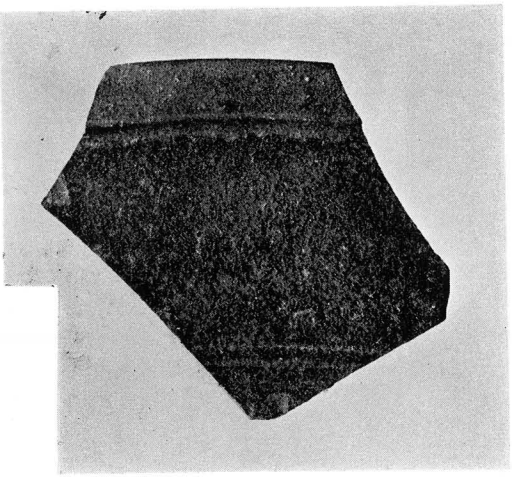


図版第一六　馬具杏葉および須恵器



(一) 杏　　葉

(二) 提　　瓶



(三) 大形壺破片